

次 目

阿含の人身觀(完結)	本多
偶詠(毒人に寄す)	大八木
佛教文學に現れたる人間性(下篇)	日義雄生
開目鈔講話(第八講)	本田義
大なる悦と歎(上篇)	小林一郎
事記	じん
○本部開報	○地方教信
○開費甚科領收及寄附金領收	○編輯室より
大藏經要義續篇(其四)	本多日生

財團統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追随ヲ許サマル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ産出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲシ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聚語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守ン進

ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セン

ト欲ソ 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮

スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シ

テ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ

教旨ノ正明 研學ノ闡達 活動ノ旺盛

此等ハ統一團ノ標語ナリ 寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適當スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ眞贊ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團署則

◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ説明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベタ皆頭布教並ニ

教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス

◎維持員 本團ノ事業ヲ實質ナ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス

◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス

◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾圓ヲ醸出セラル、方ヲ正團員トス

◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

阿含の人身觀（完結）

故大僧正

本

多

日

生

左様にして婦人の問題に就てもいろ／＼の長所を認め、且つその成佛も許されて居ることがハツキリして居るのである。

それからモウ一つは悪人の問題であるが、これは又彼の有名な百人斬の鷲掘摩といふ悪人を濟度せられた。これは殊に阿含の中に明瞭に説かれて居る、別譯雜阿含經に

鷲掘魔羅遂に佛の來れるを見、左手に鞘を持ち右手に刀を抜き騰躍して來る、彼れ奔り走ると雖も如來徐歩したまふに得て及ぶこと能はず。

鷲掘摩は百人斬を思ひ立つて九十九人まで人を斬つて、最後百人目にあ釋迦様を斬らうとして大きな刀を抜いてあ釋迦様を追つ懸けた、ところが一生懸命に走つて追つ懸けるのだけれども、あ釋迦様が静かに歩いて居られるのにどうしても近寄ることが出来ない『何故に逃げるか』と鷲掘摩は言つた『いや我

は逃げも何もしない、たゞこの通り静かに歩いて居る』『それでも私は一生懸命に駆けて居る、あなたは歩いて居るのが静かのやうに見えるけれども追付くことが出来ないのはどういふ譯だ』『どういふ譯だと言つてさういふことが聽たければ弟子になれ、教を聽かうと思へば弟子になれ、弟子が刀を振り上げるといふことはあるまい、けれども聽たくないければ聽かなくても宜い、教へて貰ひたければ教へてやらう』モウ鷲掘摩は忌々しくてたまらない、何とかして斬り付けようと思ふけれども、お釋迦様は静かに歩いて居る、こつちはいくら追ひ懸けても近付くことが出来ない『何故に近付くことが出来ぬか』と地圓駄を踏んで居ると、『それは汝が刀を持つて居るから近付くことが出来ないのだ、汝が殺害の精神を棄て刀を棄て、合掌禮拜して我に近付かんと欲すれば、駆らずと雖も直ぐ近付くことが出来る、如來は汝が殺害の心を以て追ひ懸ける以上は、晝夜間断無く汝が追ひ懸けても我が側に近付くことは出来ないその刀を投げて見よ、決して我には當らぬ』といふやうなことを言はるので、いまくしくて仕方がないけれども、遂に『參つた』と言つて刀を泥溝の中に投げ込んで頭を低げた『それでは路傍で話をすることも出来まい、少し詳しく話したいから僧坊に來い』と言つて僧坊に連れ歸つて遂に弟子にされていきなり頭を剃つてそれから話をせられた、その結果彼は非常に感激をして、所謂惡に強い奴は善にも強いといふ譯で、それがなか／＼偉い坊さんになつたといふことが別譯雜阿含經の中に詳しく説かれて居る。

それから長阿含經の中には阿闍世王が濟度されたことがある、これは大涅槃經にもあることであるが阿含の中にも出て居る

王、佛の教を聞き已つて即ち佛に白して言さく、我れ今佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依す。我に正法の中に於て優婆塞と爲ることを聽したまへ、自今以後形壽を盡して不殺・不盜・不婬・不欺・不飲酒ならん。

自分の父親を殺し、母親を殺さんとし、佛に反對をして居つた阿闍世王が遂に釋尊の教を聞いて改心して、私は今から三寶に歸依して五戒を持ちますからどうぞあなたの弟子にして戴きたいといふことを願つて居るのである。斯様にして悪人の鷲掘摩も阿闍世も濟度せられた。

さうして前に言ふやうにいろ／＼人生の煩惱に屬するやうなことを諒められた所はあるけれども、それは要するにつまらない所に眼を因はれて善い事が出来ないといふのを歎いて説かれたのであって、この點は餘程詳しく研究をする必要があるが、いま一つ確かりしたる經の證據を擧げてこの事を申して見よう。雜阿含經の中に、

世尊諸の比丘に告げたまほく、我今當に重擔、取捨、捨捨、擔者を説くべし。

斯う説かれて居る、この事を研究すれば阿含の消極的なやうに見える數の意味がハツキリわかつて来るのである。重擔といふのは重荷を擔つて居る、その重荷の爲に囚はれて苦んで居る、捨擔といふのはその重荷を捨てることで、さうして手の空いた人間となつて有要な働きをして行くことを擔者と言ふのである。

云何が重擔なる、謂く五受陰なり。

五陰と言つて眼に美しいものを見るとか、舌に美味い物を味ひたいとかいふやうな五慾の煩惱の爲に、いろいろの穢ない精神がより多く動いて、善い考が何も起らない、さうしてフウ／＼言つて疲れてしまふ、それが重擔といふものである、即ち煩惱の慾が強過ぎる爲に重い荷を擔いで居るのである。それは又或る所には斯ういふ風に説かれて居る、豚の糞を籠に入れて頭に載せて行くといふ譬に説かれて居る、豚の糞といふものは大した價値の無いもので餘り肥料にもならない、けれどもまるつ切り肥料にならない譯でもないといふので、大きな籠に一パイ豚の糞の乾いたのを貰つて頭に載せて往來を歩いて居つた、それを擔いで居る爲に他の物は何も持つことが出来ない、たゞ大きな籠を両手で支へて歩いて居つた。そこへ雨が降つて來た、乾いた豚の糞に雨が掛かつてだん／＼重くなつて來る。その中に糞が溶けてその汁が頭から顔から襟から一パイ流れて來た、眼も見えなくなるし口も開けなくなつてしまつた。

友人が見兼ねて『お前そんな物は捨てたら宜いぢやないか、大した價値も無いのに』『いやこれは大事なものだ』と言つて相變らず擔いで居る、それを捨てない限りにはどんな大事な仕事が起つても、どんな善い物がそこに在つても捨ふことも出来ない。だからそんな物は捨てる、重たくつて價値の無いものぢやないか、乾いて居れば肥料にもなるけれども、雨が降つて汁が流れてしまへば餘はモウ糟だ、思ひ切つて捨てるといふことを佛は説くのだと譬へられて居る。それを佛教は悲觀的の教であるとか消極的の教であるとか、捨てる／＼と言ふのはいかぬと言つて儒者などが攻撃をするのであるが、今の譬を一つ費えて居れば宜いのである。佛教が捨てると言つたのは豚の糞を捨てると言ふのである、それを消極的悲觀的といふのは『君はやはり豚の糞を頭に戴せて居る方が宜いと思ふのか』斯う一本突込めばギヤフンと參つてしまふ、それを釋迦は明瞭に説いて居る。さういふ重擔を持つて居つては駄目だ。ところが取擔といふのはそれを益々取込んで來るので、それだけ重い豚の糞を擔いで居りながら、又餘所の家へ行つて豚の糞を呉れと言つて慾張つて取込んだならば、遂には腰が立たなくなつてしまふぢやないか、さういふ風に重荷を取込むことを取擔と言つて居る。

云何が取擔なる、當來の有、愛、貪、喜、俱に彼々に樂着す。

佛教の言葉で有といふのは所謂保有慾と言ふか、この頃やかましい問題になつて居る人間の支配慾と言ふ

ふのである、所謂十二因縁の中の有といふのは、現在自分の有つて居る物は一つも失つてはならぬといふ考が非常に深くなつて来る。これは人間に就て考へて見れば間違ひなくさういふ傾きがあるので、お爺さんでもお婆さんでも、殊にお婆さんの方が餘計にさういふ傾きがある。うちの祖母さんはこの頃えらい慾が深くなつたといふやうなことがあつて、つまらない物を妙に懸張る、饅頭を貰つても子供にも食はさずにしまつて置く、徵が生えてまだしまつて置く『祖母さんそのお饅頭は徵が生えてしまつたぢやありませぬか』と言つても平氣でしまつて置く、それはマア饅頭だけであるけれども、さういふ精神が何事にでも及んで、持つて居る物を粗末にせぬと言へば粗末にしないのであるけれども、マア慾が深くなつて何でも自分の支配下に置きたい、お菓子を貰つても嫁が向ふへ持つて行かうとすると小言を言ふ『此處へ置いときなさい』そのくせ自分が食ふ譯ではないが、何でも自分の眼の届くところへ置かなければ承知しないといふやうに支配慾といふものが強くなる。お爺さんの方でもそれはあるので、彼の安田の親爺が遂に短刀で突き殺されたのもやはりそれである。殺した奴は無論悪いけれども、あれは五百圓とかの金を寄附して呉れと言つて來た、ところが五百圓ナンて大變な事だといふので断はつた。安田の親爺が始終言つて居つた事は、私は蓄積の精神が有るから世間の一圓は私の一萬圓だ、一圓をちやんと保存してうまく廻したら百年經つとちやんと一萬圓になる、さうすればあんたに五百圓の寄附をするのは五百萬圓の寄附に當る、そんな寄附は到底出來ないといふやうなことを言つたものであるか

ら『ナニこの親爺めづ』といふのでやられてしまつた。それをやつた奴は無論悪いが、所謂その支配慾灰吹と金持は溜れば溜るほど穢ないといふ風なその慾望が遂に身を亡したものである。飲酒家でもやはりその通りで、酒が廻れば廻るほど卑しくなつて『モウ一杯モウ一杯』と言ひ出す。それをお釋迦様は言ふので、さうやつて居ればそれが爲に益々苦しみが多くなり悶えが多くなつて来る。ところが人間は愛慾と言つて、金錢の慾望と男女の慾望といふものを無暗に高めて行くところに、取捨と言つて重荷を取込むところがある。今の頭に擔いで居る籠に豚の糞を入れる餘地があるならばいくらでも懸張つて『もつと入れて下さい』、『うちには豚の糞は無いが猫の糞はどうだ』、『いや猫の糞でも結構です』、『鼠の死んだのはどうだ』、『何でも構はない』瓦の缺けたのから靴の破れたのでも宜しいといふやうな譯で貰つて擔いで來る。さういふことを事實に現して居る精神病者がある、私は時折見懸けるが、實につまらぬ物を兩方の籠に一パイ入れて擔いで居る、それは人から財産を欺き取られたといふやうなことが原因になつて精神に異状を來して、大事な物を取られてはならぬといふ考から、大事な物は何も無いのであるけれども、下駄の壊れた奴や傘の折れたのや茶碗の缺けたなどを拾つて兩方の籠に重いほど入れて擔いで居る。そればかりではない、腰の周囲にも雑巾のやうなものを一パイ下げて居る、さうして何處かへ行く時には人が取るといふので皆んな自分の體に附けて歩いて居る。これは今釋迦が説いた取扱といふことを事實に現した良き例證である。普通の人間は表面にはさうしないけれども精神的にはち

ようどさういふ風にあれもこれもといふ慾望に依つて苦しみを作つて居るのである。そこでさういふ重擔取捨といふことを繰返して居つては何時まで経つても苦しみは除かれないと、どうしても捨捨といふことをしなければならぬ。

云何が捨捨なる、若し當來有愛貪喜、俱に彼々の樂着永く斷じて餘り無く、已に滅し已に吐いて盡く離るれば欲滅沒せん。

捨捨といふのは斯ういふ慾望を制限するのである、それは自分の物自分の物と言つて、我慾をかゝないで、保有慾を制限して餘れる物は人にも施し、憐れな者を助けようといふ風にして行く、その他所謂五慾の煩惱を制限して行くことがその重擔を捨てるといふことである。左様にして重擔を捨ててしまふとそこに残るものは何かと言へば捨者である。

云何が捨者なる、謂く士夫是れなり。

即ちそこに残るものは手の空いた何でも出来る確かりした人間が残るといふことになる。即ち釋迦はこの立派な捨者といふものを造らんが爲に重擔、取捨、捨捨といふことを説くので、捨者即ち確かりした手の空いた人間を得たいが爲に我は捨捨を説くのであると言はれて居る。その捨者即ち捨ひ得る力の有る者ははどういふことかといふと、これは無量義經にも説かれて居るが、

壯なる力士の諸有の重き者を能く捨ひ能く持つが如く、無上菩提の重き寶を荷ひ、衆生を擔負して生死の道を出だす。

一方には尊き菩提の寶を捨ひ、一方には憐れる衆生を捨ひ、善き道と憐れる者とを捨つて行くのである。この二本の手は一本は正しき教の爲に、一本は憐れる者の爲に使ふことが出来る、その強壯なる捨者を造らんが爲に、豚の糞や猫の糞や鼠の死んだのを捨てろと説いたのだと言はれるのである。それが何が悪いか、決して消極だの悲觀だのといふけちを附ける點は無いではないか。どうしても人間にはこの教訓がなければ、さういふことに囚はれて、豚の糞を大事にして居る間は到底人を救ふの世の爲に働くのといふことは出来得るものではない。今日の日本の佛教家などは、どつちかと言つたならばやはり豚の糞や猫の糞を世間で集める上に、更に佛教の信仰といふ名の中でさういふ慾望を達せんとするが如きことを申して居るのである。觀音様が流行つたり、お不動様が流行つたりするのはさういふ譯ではなからうかと思ふ。

佛教の本當の教は左様な意味合であつて、消極的の教訓のやうに見えることも非常な積極を意味して居るのである、況や積極的の教訓が澤山現れて居ることから考へたならば、輕々しくさういふ言葉があるからと言つて佛教を批評することは往々間違ひに陥り易いことであるから、從來の學者が佛教を憎み

佛教と説んが爲に言うたやうなことを、何時までも日本人の人達が考へて居つてはいかぬと思ふのである。彼等は佛教を正當に理解するところの學問が無いばかりでなく、さういふ公平なる感情を有たないのである、初めからけちを附けようといふ料簡と、佛教に無知識であるといふ、無智と驕慢と邪念とを以て佛教にけちを附けたものである。今や閻魔の法廷で思ひ知る所があるのであるだらうと私は思つて居る。このやうな偉大なる教に對して彼等が淺薄なる知識、狹隘なる觀察を以て、如來の聖教を漫りに批評したといふことは甚だ潜越なことである。さういふ妄評を受繼いでそれに屈従して居る今の日本の國民も、暗愚といふことの譏りを免れることは出來ないといふことを、私はハツキリ申上げて置く次第であります。

(完)

偶　詠

婦人に寄す

大八木義雄

黒髪にうたせし浪は消えもせむ　癖をつけそ乙女こゝろにはしたために子供任せて日すからに　家をよそなるをみな轉てし時と世に伴なひつつもいにしへの　道を忘れぬをみななつかし

佛教文學に現れたる人間性（下篇）

文學博士　本　田　義　英

男女の問題を解決する相續實踐

を一乘といふ眞理の立場から平等化する考へ方なので、さういふ考へ方からこれ男、これ女と分別せざれといふことが言はれたと思ふ。

ところがその從地涌出品を說かれる一つ手前の品は安樂行品といふのがある、その安樂行品をみるとその地涌の菩薩であるべきものゝ覺悟が說かれてゐる。即ちその人間の子たるべきものゝ覺悟が說かれてゐる。そこを見ると「これ男これ女と分別せざれ」と說かれて居る、何も男であつても男でなくても、女であつても女でなくとも何等差支へないといふことなんです。男女超越なんです。男女超越といふことは即ち男女の差別を認めながら、しかもその差別

變成男子、即ち女は一度男に變成してから成佛するといふやうな、そんな妥協じみたものではなく、

そんな生やさしいところには佛教の眞面目がないやうに思ふ。勿論變成男子といふことは慈悲深いこの

佛陀の方便的な施設であり、そこに佛教の宗教としての味ひがあるけれども、變成男子といふことを字義通りに解釋するやうなさういふやうな生やさしい

ことでは、佛教の男女觀は恐らくわからないと私は思ふのである。

然し乍らこれ男、これ女と分別せざれとかう申しても、事實男女の差別といふことは事實です。男女の區別を分別せざれと言つたところで、男は男、女は女であるのであって、その事實は之をどうすることも出来ない、その動かすべからざる事實をどう解決するかといふのが問題になつて來るのである。

この點について私は相續實踐そのことが中心となつて、こゝに男女相對の問題が自然に解決される

のではないかと信ずるのである。

そのまゝの姿が涅槃でありたい

これは、如法眞理の相續實踐、これに依つて人類全體といふものが永劫に安寧幸福であらねばならぬ、またあらしめなくちやならないといふ精神からい、三千大千世界一切の事象は皆悉くこの佛教の立場からみるならばその儘實相なのであつて、言ひ換へれば全人類が現になしつゝあるところの事柄、その事柄のすべて、また一切の事々物を何もかもすべて、その儘が實相であるといふことを佛教の立場から言つてをるのであつて、法華經だけに限らぬが、特に法華經はその精神を中心にして居るのであるが、それに關する法華經の中の或る經文を天台大師が八字に要約されまして治生産業皆是佛道と言つてをられるやうに、一切の事々物皆そのまゝ正法眞理に包摶されないものがないと

いふ意味なのであつて、一切の事々物々それが正法眞理の光明に照らされる時、それ等がそのまゝ佛教の正法に即するといふ意味なのです。

それで假令佛教徒であつて、しかも外道の書を讀んで、何を讀んでも、何を取扱つてもその讀む態度、取扱ふ心が正法眞理に適ふてさへるならば如何なるものであつても、それがそのまま如法行であ

り、眞理化されるもの否、それがその儘眞理に即して居るものなんだといふことである。またまさに知るべしこの處、即ちこれ道場なりとも説かれてあつて、たとへ私がこのテープルの前に立つてをらうとも、口あけて歩いてをらうとも、どこに坐つてをらうとも、寝てをらうとも、座敷であらうとも、台所であらうとも、私なるものが假りに眞理に順應してをるものであるならば、この私に即する場所が即ち道場であり、こゝで佛様が法を説き、涅槃を示したもうただといふのであつて、さういふこと

が言はれてをるよう、その有りの儘の委が、即ち佛様の委で、眞理の光といふものが別なところにあらぬ。いはば實相その儘が眞理の内容を形成するものなんである。佛教の他の言葉で申すならば、その實相である眞理の内容はこれを涅槃だと言つてもよからうと思ふ。

しかし涅槃と申しても決して空々寂々の境地ではなく、實相その儘の委が涅槃の境地なんであつて動くものは動く、靜なるものは静、泣くものは泣く、笑ふものは笑ふ、その儘の委が涅槃でなくちやならない。

併しその實相涅槃の世界に到るといふことは、もとよりそれは容易ではない。こゝに佛教中にも種々の宗派の分れる理由があるのであるが、さういふことは別として、兎も角涅槃を得るといふことはなかなか困難です。だからそこに佛教界内に於てもいろいろな淨土といふものを設けて、その淨土を通して

自然に涅槃に導かうとする信仰もあり、又、かかる信仰が、自然の要求として起り来る理由も在するのである。

淨土と言つても、東方淨土あり、西方淨土あり、天界淨土あり、現世淨土あり、區々まちまちであるが、その區々まち／＼であるといふところに、本當に淨土なるものゝ味があるやうに思ふのである。

一人ひとりにありたい淨土

一體淨土の要求といふものは自然に起つて來るのであつて、その自然の要求があつたればこそ佛教の界内にも諸種の淨土が説かれてゐると考へる。だから淨土といふものは決して私は否定しない。淨土といふものはなくてはならぬ、過去の淨土も、未來の淨土も、現世の淨土も、皆淨土なんである。私の考へを露骨に申すならば、今假りに日本帝國國民といふものが相互密接に結びついて、恰も百川が一味の大海上に流れ込んで、平等の一昧になるやうに、

そこに一味の大淨土が建設されるのであると思ふ。淨土同士で喧嘩をしては、その淨土はつまり穢土だと白状してゐるやうなものです。一大淨土といふ力強い絶對の包容的淨土こそ、佛教本來の本當の淨土であると思ふ。私はかかる淨土を決して否定しようとは思はぬ。必ずなくてはならない淨土です。そして淨土といふものを中心として、所謂淨土宗では住相遷相といふことを盛んに説くが、又淨土教以外といふだけに限定して、假りに九千萬あるとするならば、九千萬の淨土が、一大淨土に依つて統制されるのだと私は思ふ。決して淨土の分裂ぢやなく、又個々のその淨土といふものが離れ／＼ではなく、個々無數の淨土といふものが相互密接に結びついて、恰も百川が一味の大海上に流れ込んで、平等の一昧になるやうに、

の佛教一般の方の言葉で申すと、不_住涅槃と申して淨土に住き涅槃に入つても、しかも淨土や涅槃の世界に寂々と住しないで、人間世界に還り來りて、盛んに正法真理の指導をしてをるといふ教へであつて佛たるべきものは涅槃に入つて、しかも涅槃に住せず。涅槃の世界から慈悲行實踐のために迷ひの世界に動き來りて、盛んに活動し續けてゐる、その活動の姿それがそのまゝ佛なんで、ボツンと涅槃の世界に入つてこゝ迄おいでといふやうな調子で、單に人類の悩みを見下して居るといふやうなさういふ薄情の佛様ならば私は別に有難いと思はんのです。

涅槃の力に湧く無限の力

この不_住涅槃といふことは、もう少し人間の純正なる本能と關係せしめて説明すると、たとへば、われわれが芝居をみても面白かつたら黙つてをられぬその面白かつたことを人に言ひたい、事實あり面白

かつたといふことは言はずにをれないものなのである。それと同じやうに涅槃に入つたらその自分だけが獨りで楽しんではをれぬ、何とかして他人の人々をも涅槃に入れてやりたい、他人を顧みないで、その盡にしておくことはそれは人間の純正なる本能が既に許さないところだと思ふのです。

譬へば變な譬へて恐縮ですが、佛様だつてさうだと思ふ、涅槃に入つて自分だけ樂しみ、何ならこゝ迄おいでといふやうなことは、堪えられないところなのである。その自利利他慈悲圓滿の活動の力、縱横無盡に活動を續けるその姿、それが佛様ぢやないか、だから佛様は、十方無邊に在しますといふのです、佛陀の光明は十方無量だといふのです。

そしてわれ／＼個人々々が既にその無量光明中の一光明の姿なのです、即ち佛子であり、佛教即ち正法の受持者、相續者、實踐者でなくてはならぬ筈なのです、無量の個人々々がそれ／＼佛であり、光明

の持主であるのであるから、人間の住するところ、残る限ないやう光明を與へるといふ事實から、そこには光明無量といふことが言はれるのであると思ふ。自分一人だけジツと静まつてゐるといふやうなそんな薄情の姿ぢやない、一刻一瞬の間も決して休まぬそして自利利他のために働くその働く姿が佛様の姿なのである。

そして自利利他のために精神努力を続ける姿、その儘が淨土の眞實相なんです、涅槃の眞實相なんである。言葉を換へて申すと、變な言ひ表はし方ではあるが、涅槃の實踐といふことなんです。妙な言葉ですけれども、眞實の涅槃といふものはかういふ世界であらうと思つて居る。そして涅槃の實踐といふところに佛教の眞面目があるのでないかと私は思ふ。

大に働きながら起て居るのである。人が呼んだつて、惡口言つたつて聞えやしない、しかし居眠つてゐるのではない、大いに活動してゐる。謂ばそれが涅槃の世界ぢやないか、そしてこれは男でも女でも同じです。

眞實の淨土相と人間完成の世界

私はそこに人間性といふのがあると思ふ。つまり一心不亂の活動の姿、それが涅槃の姿で、そこには男といふ意識も全然ない。活動してゐるといふ意識すらもないでしよう。これ男、これ女と分別せざれとは、こゝのところを説いたものであると私は思ふ。

これは佛教ばかりぢやない、印度の婆羅門教の方にも實はかういふ考へがあるのです、それで先程申したところのこれ男これ女といふ分別を離れるといふ境界は、事實我々に於て多少なりとも、經驗的に

さい、地震に遭つてごらんなさい、常は雨戸一つあける力もないものが、さあ火事だ、さあ地震だといつた場合には、ドカンと戸を開ける力が出る、その力はどこから出て来るか、又その戸を開けてゐる時にその心はどうです、火事だから、地震だから、あけなくちやならんとか、何とかいふ條件はなくて、ただひたすらに無條件的な心持でウンと押してをるのです、そしてどうして出たか後になればわからぬといふ人が往々あるのです、その場合若し條件附の心持であるならば、そんな力は出やしないのです。まあそしした無條件的な力が涅槃の力とでも想像出来るのです。涅槃の力に依つてこそ私のかういふ瘦せた男でも時には十倍二十倍の力がグツと出るのです。

そしてその様に無盡の力を出し、一生懸命に物事をやつてる時には、人が物と言ふてもわかりやしない、けれども決して居眠りをしてゐるのぢやないこれを反省して益々精進を加へ、我々の生活内容を一層この三味的な活動的世界に於て深めて行くことに注意することが、佛教の教へであらうと思ふのである。

だからこの現世といふものを永恒の淨土にしようとしないと、それは個人々々の力に依るのであつて實はなかく困難なのである。こゝにも亦佛教界内に種々の淨土が施設せられて、涅槃への指導に慈悲深い光明が照らされるといふ教へが生れて來るのである。

けれども、淨土施説の眞目的は、涅槃の相續、實踐といふ點に存しなくちや駄目だと思ふ。だからお經の言葉を少し拜借するといふと、大きな劫火で燃えてゐるところの、即ち淨土教の言葉で申すところの穢土、即ち現世にも、否、現世なればこそ今申し

たやうなその活動的な本當の涅槃の境地が存すると言ふ。それで居るのであつて、その大火で充满するその士がその儘淨土の姿とならなければならぬといふのです。三界は火宅ではあるが、しかしその三界中の一切衆生が、皆これ佛様の御子だと言はれるものである。三界は火宅ではあるが、しかしその三界中のあらゆることを説かれたのであつて、この身このまゝなものゝ涅槃の姿に住してをるといふ境地こそ眞實の淨土の相であり、しかもこの身このまゝなのであるから、謂はゞ人間性の完成の世界といつてもよからうと思ふのである。

非常時に際し聖日蓮を憶ふ

又かういふことも經文に説かれて居る。即ち、娑婆は荒れ狂つてゐる。しかもその惱みに満ちてゐる現世娑婆なればこそ、そこに始めて涅槃の姿がみられる。自然に人間界その儘に、淨土が顯現し、涅槃の世界たらしめることが出来るのであるとかう説か

そして人間性がその眞實性であり菩薩性であるのであるから從つて男女といふ差別の世界から、絶對の人間性への完成のプロセスとして、そこに男女の區別が存するに過ぎないのであつて、いはゞ男女といふ差別そのまゝ、そこに平等の立場を見出すといふのが人間性完成の途であると信ずるものである。即ち自らの人間性の完成、それと同時に他の人々の人間性をして完成せしめやうとする我々の美しい精神的、三味的な活動を續ける姿、その實踐の姿、それが人間性の姿であり、それが本當の人間なのです。この點に於きまして涅槃を語り、又淨土を説くといふことは單なる宗教家の仕事であつてはならない、人間性即佛性なのだから、治生産業皆は佛道でなくてはならない。智慧第一の文殊を論破したのは居士の維摩ではなかつたか。

佛教といふものは單に僧侶のみの専有物ではない。僧俗共に全人類が正法眞理の實踐者であり、行者はあらねばならないといふことを説くのが佛教の

れて居るのである。

かゝる淨土、かゝる涅槃の世界に住する人こそ、前に申しましたところの所謂『是の人』であつて、自利利他的活動が出来る筈なんです。だからこの人世间に行じて、衆生の闇を滅し、一乗に住せしめると說かれた所以である。そしてこのことは單なる理想ではなく、事實我々によつて實踐し得る事柄だと私は信じなくてはならぬと思ふのです。そしてさういふ人こそ本當にこれ男これ女と分別しない人間であらうと私は思ふ。そこに自然に男女の區別や尊卑を分別しない人間性の發現が存するのではないかと思ふのである。

言葉を換へて申すと、先程から申したところのこの人間性と申すところは、つまり人間性その儘それが佛性であり、菩薩性であるといふことなんです、佛陀になつた時に男もなければ女もないのです。忠君愛國といふ前に、先づ忠君愛國を實踐しなくちやならない。

實踐の存する所、必ずそこに自ら看板が掲げられるといふことにならなくちや嘘だと私は思ふ。その職業の如何に拘はらず男女の如何に關はらず、全般の人の人間性をして完成せしめやうとする我々の美しい精神的、三味的な活動を續ける姿、その實踐の姿、それが人間性の姿であり、それが本當の人間なのです。この點に於きまして涅槃を語り、又淨土を説くといふことは單なる宗教家の仕事であつてはならない、人間性即佛性なのだから、治生産業皆は佛道でなくてはならない。智慧第一の文殊を論破したのは居士の維摩ではなかつたか。

眞面目ではないかと思ふ。

況んや男女の別といふが如き區々たる問題に於てをやである。この點に於て法華經の學者とも言はず法華經の論者とも言はず、法華經の實踐者、即ち法華經の行者と名乗りて、女性の不淨觀を淨化し、女性の能力を強調し、男女の差別を認めながら、しかも人間性の完成のために、身を以て法華經を實踐し立正安國、正法のために、佛教を人間の世界に活用された、人間としての日蓮上人の如き人々が、殊にこの非常時と言はる現代に、續々と出現せられんことを私は愈々熱願してやまないものである。

(畢)

堪忍之十德

忍是安樂也 忍能作親友
忍能息諸苦 忍能得長壽
忍能除貪瞋 忍能滿六度
忍能具眷屬 忍能得菩提
忍能具端正 忍能降伏怨

開目鈔講話

(第八講)

小林一郎

其故は佛世尊は實語の人、故に聖人・大人人と號す。外典外道の中の賢人・聖人・天仙など申は、實語につけたる名なるべし。此等の人々に勝て第一なる故に、世尊をば大人とは申ぞかし。

法華經以前の諸經と法華經とを比べて見ると、そこに非常な差があるといふことを認めなければならぬ、何故なら「佛世尊」すなはちお釋迦様は、實語の人である。本當の事しか仰しやらないお方であ

る、佛の話に偽りはない。始終眞實の事を說いて一切の人を導かれるのであるから、それで佛様のことを「聖人」すなはち覺つた人とも言へば、或は「大人」すなはち一切の人にも最も勝れた方とも申すのである。尤も「外典、外道」すなはち支那の儒教とか印度の婆羅門教とかいふ方の人々でも、その勝れた人になれば「賢人」とか「聖人」とか「天仙」とかはいはれて居る。それはやはり實語の人であつて、人を欺くとか、世を惑はすとかいふ事は一切なくて、人世のため人の爲に眞實の事を說いて居られたから、それで斯様に尊敬されて居るに相違ない。けれども

これ等の尊敬されて居る人々と比べて見ると、お釋迦様はまた特別であつて、これ等の人々に比べることの出来ない程の第一に勝れた方であるから、そこで特に佛様のことを「大人」と申して、何人も此の佛に超す者は無いといふのである。

此大人、唯以一大事因縁故出現於世とな
のらせ給て、未顯眞實、世尊法久後要當
說眞實、正直捨方便等云々。多寶佛證明
を加へ分身舌を出す等は、舍利弗が未來
の華光如來、迦葉が光明如來等の説をば
誰の人が疑網をなすべき。

其の大人であるところの佛様が、法華經の方便品に於て、佛の世の中に出現された目的を明かにされ、『唯だ一大事の因縁を以ての故に世に出現す』と言つて居られる。佛様は一體何の爲に世の中に出ら

人々の具有して居るところの佛性を十分に伸ばして養つて大きくして、さうして皆な佛の境界に到達するやうにしてやりたいといふ考へで、此の世に出現したのである。これが佛の世に出た目的であるといふことを言つて居られるのであります。

佛はさういふ目的で世に出たのだけども、人々の機根がまだ十分でない時に、初めからさういふやうな事を説いても、人々には到底その意味が判らないから、それで『未だ眞實を顯はさず』で、今まで四十餘年の間には眞實の事を言はないで、方便の事を説いて居つたといふことを、無量義經の中に言つて居られる。しかしながらいつ迄も方便ばかり説いて居るべきものではない、久しく教を説いた後には、要す眞實の事を説くにきまつて居る。世尊は法久しいうして後、要す當に眞實を説きたまふべし」とは此の意味である。これは釋尊ばかりではない、佛であれば皆さうである。其の佛たるところの道を全

れたかといへば、此の一大事を人々に教へる爲に出了られた、これより外に佛が世の中に出られた目的は無いぞと、斯う言つて居られる。其の一大事といふのは何事であるかといへば、それは佛と等しき智慧を人々に與へ、佛と等しき覺りを人々に與へて、人々をして皆佛の境界に到達せしめたいといふ、これが即ち『一大事』である。人間は今眼の前で見たところでは善人もあるが、惡人もある、愚かな者もあり賢い者もあるのだけども、その愚かな者でも、惡人といはれる者でも、其の心の奥には貴い佛性を具へて居つて、決して見捨てゝしまふべきものではない。其の佛性がだん／＼と養はれて大きくなつて行く時に於ては、一步々々と佛の境界に近づいて行けるのである。しかしそれには正しい教が必要である、教の力に依らなければ、其の佛性を育てゝ大きくなるといふことは出來ない。それだから自分は世の中に出で正しい教を説いて、その教の力に依つて

うする爲に、釋尊もこれから眞實の教を説かれるのであるといふことが、法華經の方便品の中に言つて、『正直に方便を捨てゝ、これから無上道する』又同じ方便品の中に『正直に方便を捨てゝ但だ無上道を説く』とある、今までには方便を説いたのであつたが、其の方便を捨てゝ、これから無上道する、斯う言つて居らつしやる。斯ういふやうにすると、斯う言つて居らつしやる。斯ういふやうにし、お釋迦様が御本心をスッカリ打明けてお説きになつた場合に、多寶如來が現れて来て、これは確かに間違ない、釋迦如來の仰しやることは眞實であると言つて證人に立たれた。又十方の世界から多くの佛が現れて来て、舌を出して釋尊の眞實の教を説明されたといふこともあるのである。

さういふ譯であるから、此の法華經に於て、釋尊が舍利弗等に對して、お前達はこれから菩薩の行を積んで行けば、末には必ず佛の境界に到達し得るも

は無い筈である。佛様が特にこれから本當の事を言ふぞと仰しやつて、然る後に舍利弗等に對して、皆佛に成るぞと仰しやつたのだから、何等の疑ひもない譯である。これは誰が考へても間違のない事である。併しながら法華經は斯の如くだけれども、法華經以外の經に於ては、これとは全く異つた趣旨を以て教を説かれて、小乗を習つた者は佛に成れないぞと言つてある。此の二つの區別を更に明かにしなければならない。

而ども爾前の諸經も又佛陀の實語なり。

それで爾前の經と申しますのは、即ち法華經以前であります。法華經以前の教もやはりこれは「佛陀の實語」お釋迦様御自身の仰しやつたことに違ひないのでから、その中の言葉も決して捨てる譯には行かないだらうといふことであります。それが方便です。方便といふのは、前にも申したやうに、眞實本當に見込がないのではない。そんな事では逆も駄目だからモウ一層奮發しろ。斯ういふ意味で、逆も駄目だといふことを言はれるのであります。それも亦佛様の本當の慈悲心から出たものとして考へなければならぬのであります。

その事を今こゝで申します。だから佛の大慈悲のお心持を本當に知らなければならぬ。この前にも申したやうに、方便品の中には『我本誓願を立て、』自分は教を説き始める一番初めから、皆の人間を佛様御自身と少しも違はないやうなものにしてやらうといふことの誓願を立てた。併しなか／＼そんな事を言つたつて急には解らないから、方便としているいろな教を説いたのだけれども、初めの精神は要す

ることを、心から望んで居らつしやる。それだから皆本當に奮發する爲に、方便として『低い教を習つただけでは逆も駄目だぞ、お前達は見込が無いぞ』、斯ういふ事を言はれる。見込が無いと言はれるのは、本當に見込がないのではない。そんな事では逆も駄目だからモウ一層奮發しろ。斯ういふ意味で、逆も駄目だといふことを言はれるのであります。それ

の教に入る一つの道筋であります。譬へば子供がどうも品行が悪くて仕様がない、持餘し者だといふ時には、親父は子供に意見をする。それでもなかなか肯かないといふと、親父は言葉を激しくして『どうもお前のやうな者は自分の子とは思はない、早く死んでしまつた方が宜い』といふやうなことを言ふでせう。それは子供の死ぬことを望んで言ふのではなくで、子供がさういふ言葉を聞いて奮發して死なないで宜いやうにしたいと思ふから死んでしまへといふことと言ふのです。それが本心です。それを彼處の親父は子供を殺す方が宜いと思つて居るのだからナンと言へば、それは察しが足らないのであつて、死なせたくないから死んでしまへといふことを言ふのでせう。それと同じ事であつて、佛様は一切の人々が皆佛の大乗の道を學んで、所謂菩薩の行を勵みまして、大慈悲を以て一切の人に接するやうにといふ尊い事に思はれるのであります。

それでその實例をこれからだん／＼擧げて居ります。

大方廣佛華嚴經に云く、如來の智慧大藥王樹は、唯二處に於て生長の利益を爲作^すこと能はず。所謂二乘の無爲廣大の深坑に墮つると、及び善根を壞る非器の衆生の大邪見貪愛の水に溺るるとなり等云

例へば華嚴經といふお經の中には斯ういふ事が説

無爲

いてある。佛様の智慧といふものは廣大無邊なものであつて、ちょうど大きい樹が生えて居ると、その樹から枝も出て来るし、葉も幾らも出で来る。初めは小さい樹であつてもだん／＼大きくなれば非常に大きくなつて、枝も伸びるし、葉も伸びて、その周囲全體を覆ふことが出来る。それと同じやうに佛様の智慧といふものは實に廣大無邊なもので、有ゆる人間を救ふ力を有つて居る。ところが一切の人間も皆佛性を有つて居る。佛に成るやうな本性を有つて居るのだから、修行さへして行けば、その佛と同じやうな智慧を具へることが出来るのだらうけれども、たゞ二種の者だけは、その折角有つて居ることころの佛性をだん／＼と育てゝ、世の中に利益を與へるといふことがない、その二種の者といふのはどういふのだといふと、一つは『二乘の無爲廣大的深坑に墮つる者』無爲といふのは、これは

有爲

と相對して居りまして、有爲といふのは世間の生活を言ひます。一體『有』といふのは差別といふ意味です。世間の普通の生活をして居ります者は、皆差別をする。親しいとか疎いとか、近いとか遠いとか、儲かるとか損が行くとかいろいろな差別をする、その差別をして生きて居りますのが所謂有爲です。それからさういふ世間的の差別の生活を離れて、本當に清淨な生活をするのが無爲であります。ですから無爲といふのは世間の差別的生活を離れた者といふ意味です。

ところが本當に世間の生活を離れてそれで満足すべきものではない、自分が世間の利害損得の外に立つて居つて、自分の心が安らかになり、その安らかな境遇から世間の人をモウ一遍見ると、如何にも氣の毒である。皆どうも損だとか得だとか、斯うやつたら儲かるだらう、斯うやつたら儲からないだらう

といふやうなことで、オツタ返して騒いで居るのだから、如何にも氣の毒である。氣の毒だと思つたら、その氣の毒な人間を何とかして救つてやりたら、その氣の毒な人間を何とかして救つてやりたが、甲斐が無い、だから無爲は無爲だけで止まらない、あゝいふ迷つた生活から離れさせてやりたいといふ心持が起きる筈です。それが起きないやうでは折角修行した甲斐が無い、だから無爲は無爲だけで止まらない譯です。無爲の生活に入つたら、モウ一遍有爲の方の生活の、差別的の世間に身を下して、自分が覺つて居りながら、その迷つた人間と一緒に住んで、だん／＼に彼等を教へ導くといふことをしなければならないのです。それが解らないで、この無爲といふことを非常に偉いことだと考へて、モウこれで澤山だと思ふといふことは、それはちょい外はないといふやうに思ひ詰める。それはちょうど坑の中に墮ちたやうなものだといふのです。『無爲廣大』と言つて無爲を偉いものだと思つて、これうど坑に墮ちたと同じだ、人間は何をしてもこれで

澤山だと思つてはいけない。佛様といふものは廣大無邊な智慧を具へ、徳を具へ、力を具へて居らつしやる方だから、佛様と同じになるまでは吾々は修行を止めてはいけない。途中でこれでモウ澤山だ、自分も大分覺つてもうスツカリ解つたといふやうな自己惚れた氣分になれば、それで行き止りになつてしまふのであります。それはちょうど道を歩いて深い坑に墮ちたやうなもので、モウ手も足も出ない。自分で坑の外に出られなければ他の人を助けることも出来ない。それではいけない。

だから小乗の教を學んで、世間を離れたやうな生活をしてそれで自ら足りりとするといふことではいけない。それはちょうど坑に墮ちたやうなものだ、斯う言はれるのです。さういふ所を一つ離れなければいけない。これが所謂菩薩といふものの大事が所であります。その坑に墮ちたやうな、世の中と離れて切つたやうな生活で安んじて居る者、これは逆も佛

の境界には到達することが出来ない。これがその見込の無い一つの者である。

それからモウ一つは、「善根を壞る非器の衆生」善根を壞るといふのは人の爲に力を盡すといふことを一切考へない。非器は世の中の役に立たないといふ意味であります。人間といふものは相持ちであります。して、お互に助け合つて、お互に救ひ合つて行くから世の中といふものは善くなる。それを人の爲に力を盡さうといふ心持がなければ、まるで世間には役に立たないものであります。さういふ人間は大きな邪見を有つて居る、邪見といふのは人間の本當の性質を見損つて居る者、それが邪見です。今までにも幾度も申したやうに、一體世の中にどんなものでも孤立して居るものは無い譯です。皆相俟つて、お互に助け合つて各々存在して居るのであつて、存在するといふことは其に存在するといふことであつて、何も周囲の關係、周囲の境遇を離れて、自分だけの

力で存在するといふものは世の中に無い譯です。他から助けを受けて居る。その代り又自分の骨打つて居る事も他の助けになつて居る。互に助け合つて、互に補ひ合つて居るから、お互が毎日を無事に送れる。その大事な性質をまるで忘れてしまつたものが所謂邪見で、洵に間違つた觀方であります。その邪見が熾んになりますと、貪愛と言つて、即ち自分の慾望だけを主にする、人はどうでも、自分さへ宜ければよいといふやうなことになる。さういふやうな者は、これはなか／＼佛の教に歸依して、意義の有る生活に入るといふことは難かしい。

それで今二乘といふやうな生覺りをした者と、それから自分の慾望にばかり執はれて、人はどうでも自分さへ宜ければよいといふやうなことを考へた者と、この二種の者はどうしても容易には教はれない。斯ういふ事を華嚴經の中に言つて居る。

此經文の心は、雪山に大樹あり、無盡根、となづく。此を大藥王樹と號す。閻浮提の諸木の中の大王なり。此木高は十六萬八千由旬なり。一閻浮提の一切の草木は此木の根ざし枝葉華果の次第に隨て華果なるなるべし。此木をば佛の佛性に譬たり。一切衆生をば一切の草木にたとえ。但此大樹は火坑と水輪の中に生長せず。二乘の心中をば水輪にたとへたり。此二類は永く佛になるべからずと申す經文なり。

その經文の意味を説明して見ると、雪山といふ印度の北の方に在る大きい山、これは今言ふヒマラヤ山であります。其處に大きな樹がある、その樹は無盡根といふ名を附けて居る。地面の底の何處まで根

ものであるといふことである。これは佛様である、その佛様のお力が現れて一切衆生の佛性と成つたのである。それを一切の草木に譬へたものである。これは極く簡単に書いてありますけれども、前に法華經のお話の時に申したやうに、この天地の間にはたゞ一つの佛様が有るのみであつて、本當を言へば佛様は一つしかない。その一つの佛様といふものは絶對のものである。これを本佛と申すのである。たゞ一つの佛、その尊い佛様の性質が現れて、いろいろなはたらきをなすことは、ちょうど空に太陽が一つあるといふと、これが現れていろ／＼なものを見照すと同じことである。それでいろ／＼な佛様、譬へばお釋迦様であるとか、多寶如來であるとか、阿彌陀佛であるとかいふやうな佛様が世の中に出て来られたのは、皆この本佛といふたゞ一つの佛様が現れたものに外ならない。であるから諸佛は畢竟一佛の現れだ。斯ういふのです。

ところがどんなに偉い佛様が世の中に出て行らつしやつて、どんなに善い教を説き下さつても、その教を聞くところの人間が、その教を辨へることが出来ず、又その教を信することが出来ないならば、折角佛様が世の中に出て教を説きになる甲斐がない譯であります。有難いことに、私共はこの佛の教を聞きますと、初めはかか／＼解らぬけれども、だんだん懸念に教をお與へ下されば、その教が解りまして、解ればこれを信じます。信すれば又これを實行するといふことになりますから、これに依つて私共も教はれる。その私共がどうして教はれるかと言へば、銘々に佛性を具へて居るといふことを前から言はれて居る。この佛性を何故具へて居るかと言へば、それはやはり一つの佛様の力が現れて吾々の佛性となつたのだと言ふのであります。

理解されて、又その教が信ぜられるといふことになりますから、一切の人間が皆佛の境界に近づいて行くのだ。

これは法華經の中にさましては到る處で少しつつ説かれて居りまして、結局壽量品に至つて遺憾なく説かれたのであります、それを今こゝに言つて居る。一つの大きな樹があつて、その大きな樹の力が通ひ合つて、世の中の草や木になつて育つといふことと同じ事で、唯一の佛様のお力が、吾々の心に佛性となつて現れ、又佛様のいろ／＼な説法となつて現れて、その佛様のお説きになつた教といふものが吾々の心に佛性として通ひ合つて、その教が

質が賦與されて居る。又お釋迦様となつたり、多寶佛となつたりして、世の中に出て教を説き下さつて、吾々の有つて居る佛性を大きく育てゝ、だんだん伸ばして行くやうな道をお教へになる。斯ういふことであります。だから教が與へられるのも、亦教を信するのも、畢竟するにこの一つの佛様、本佛といふものの現れに外ならぬ。斯ういふことあります。

ところが折角さういふやうに銘々が佛性を具へて居り、又佛の教が與へられても、その大きい樹は、火の燃えて居るやうな處と、それから地面の底に水ばかりが一巴音に廣く湛へられて居る處がある、これを水輪と言ふのであります、その火の燃えて居る處と水輪の中には生長しない。即ち二乘の心中をば火坑に譬へて居る、自分一人が覺りを開いて世の中を離れた生活をすればそれで澤山だといふやうな心持は、ちょうど火の燃えて居る坑のやうなものだと言ふ。それから、一闇提の心中をば水輪に譬へて居る。自分の我儘な事ばかりやつて、佛の教を信じないといふやうな者は、ちょうど水輪で地面の底に水ばかりあるものと同じである。であるからさういふやうな自分一人の事ばかりを考へて、迷つて争つ

れども、又少しばかり覺つてそれで安心して居る者もいきないと言つてある。

て居る者もいけないのであります、又少しばかり覺つたからと言つて、それで止まつて居る者もいけない、だから『此二類は永く佛になるべからず』生覺りをして居る者と、たゞ利己的で人の事をかまはないといふやうな者は、永く佛に成ることは出来ない、斯ういふ事を華嚴經の中に言つてあるのである。

これは方便の教でありますけれども、吾々に眼を覺ませる爲には斯ういふ教も必要なのです。さうでないと皆がいゝ加減な所で止めてしまふ、兎角に人間といふものは無精な者であります、力を咨しむといふ性質を有つて居りますから、『そんなことではいけない』と言つて、始終勵まされて行けば一生懸命になるけれども、マアその邊で宜からうと言はれると『ハ、ア宜いかナ』といふので努力を止めてしまふ。それで華嚴經の中に斯ういふ風に言つてある。たゞ利己的に生活して居る者もいけないのだけ

大集經に云く、二種の人あり、必ず死して活きず。畢竟して恩を知り恩を報ずること能はず。一には聲聞、二には緣覺なり。譬へば人ありて深坑に墮墜し、是人自ら利し他を利すること能はざるが如く、聲聞・緣覺も亦復是の如し。解脱の坑に墮ちて自ら利し及び他を利すること能はず等云々。

それから大集經といふお經の中にも同じやうな事が説かれてありますて、凡そ世の中に二種の人があるそれは『必ず死して活きず』ちょうど病氣に罹つた者がその病氣が癒らないで死ぬと同じやうなもので、だんく迷ひが多くなつて来て、佛の教を聞く

そもそも逆も眼が覺めないやうなものになるだらう。さういふやうな者は畢竟恩を知り恩を報することが出来ない。佛様の廣大な御恩を知つて、その佛の御恩に報ゆる爲に骨折るといふやうなはたらきは出来ないだらう。その二種といふのはどういふのかと言へば、一つは聲聞であつて、一つは緣覺である。

聲聞・緣覺といふのは前からたび々申しましたが、佛の教を聞いて、さうして世の中が無常だと考へて、世間の事柄などまるで注意しない、自分は世間を離れた生活に満足するといふやうな者、それが聲聞と緣覺であります。さういふのはモウ自分で世間を離れた生活をして居つて、それで澤山だと思つて居るのだから、更に進んで世の爲、人の爲に力を盡さう、一切の人を救はうといふやうなはたらきは出来ない。譬へば人が非常に深い坑の中に落ちてしまふといふと、モウ手も足も出ないから、自分を利

する、自分がそれより進歩するといふことも出来ず、又他の人を利する、他の人を救つたり教へたりすることも出来ない。それと同じ事で、聲聞とか緣覺とかいふやうな、佛の小乗の教を聞いて世の中を無常と思つて、世間離れした生活を尊いと思つて居るやうな者は、同じことである。解脱した、世間を離れたといふその心持はちょうど坑に墮ちたやうなもので、自ら限つて居る、モウこれより以上出て行けない。坑に墮ちるといふことは自分を限るといふことです。自分を或る境界の中に閉ぢ籠めてしまふことです。これはいけないことです。譬へば金が欲しい、金より外何も要らないといふ人は、これは金が欲しいといふ坑の中に墮ちてしまつた人である。手も足も出はしない、又名譽が欲しい、名譽さへ得れば宜いといふものは、それは名譽といふ坑に墮ちてしまつた者で、出ることは出来ない。本を読みさへすれば何でも宜いといふものは、本を讀むといふ

坑に墜ちてしまつた者で、モウ出ることは出来ない。それと同じやうに俺は覺つたと言つて、本當に覺らないのに覺つたやうな氣持になつた者は、覺つたといふ坑に墜ちてしまつた者であつて、モウそれから出ることは出来ない。自分もそれきり進歩しない。又世の中の人を教ふところの大きなはたらきを生ずるよりも出來ないのである。それを戒しめて居る。ちようど解脱といふ世間離れをした坑の中に墜ちた者であるから、自分を利することも出来なければ、人を利することも出来ない、斯ういふことを言つてある。これは洵に低い所で満足する人に取つては適切な教訓であります。

ところがこの教訓は何れも方便の教なのでありますして、人々が自分の少しばかり解つたのに満足するといふ心持を有つてはいけないと云ふことであります。それなら自分で満足してはいけないと云ふなら、何をしたら宜いか、それは菩薩の行を勧んだら

宜い。菩薩といふものは自ら利し、他を利することを主にするものである。自分を教ふと共に人を教ふことを志とするものですから、菩薩の行を勧んだら宜い。菩薩の行を勧むにはどういふ心持を有つたら宜いか、その根本の事を説き明かされたものが法華經である。それだから華嚴經でも大集經でも洵に有益な教であるけれども、その教を徹底的に學ばうといふことになると、法華經まで來なければいけない。法華經の中には、一切の人間が佛の境界に到達するといふことを理想として菩薩の行を勧まなければならぬといふことが極めて懇切に又極めて適切に説かれて居るのであります。そこまで來なければいかぬ。斯ういふことであります。

どうも私共は二つの弊害を有つて居る。一つは現在の自分を振返つて見て、心に迷ひが多いものですから、こんなに迷つて居るといふことは、これはよく／＼前の世から悪い事でもしたのだらう、こん

になり易い。それではいけないと云ふのです。何故なら人間の生命はこの世の五十年や六十年で終るものではない、吾々は永遠の生命を有つて居るのだから、今こゝでスツカリ覺り切らなくても、この心持を持続けて行つたならば、永い生命の中於ては、だん／＼と心の迷ひが無くなつて、結局佛の境界に到達することが出来やう。この遠い未來の事を信じなければいかぬ、眼の前の事ばかり考へれば、それは疑ひを起して、卑怯未練な心持になるけれども、さういふ事は極めて善くないといふことを天台大師が懇切に説いて居らつしやる。

さういふのも一つの弊害であります。又人に依りますと、少しばかり本を讀んだり、少しばかり人の説を聞いたと言つて、スツカリ解つたやうな氣になつて、モウ自分も大丈夫だ、世間の人間とはまるで段が違ふといふやうな心持になる。これを天台大師は「慢大」と言つて居ります。自惚れて自分を墮すです。自ら反省して見ると兎角さういふ風の心持

落してしまふ、これも困つたことあります。だから疑性にも傾かないやうに、慢大にも陥らないやうにしなければいかぬといふことを戒しめてあるのであります。これは洵に結構な教訓であります。どうも人間としてはどつちにか傾き易いものでありますから、そこを能く考へなければいけない。

ところがそれは自分一人の事を考へて居つたのでは、さういふやうな弊害を完全に除くといふことは出来ないので。自分一人の五十年か六十年の一生天涯を考へて見れば、どうなつたつて多寡が知れて居るものだといふやうな氣になりますから、奮發が出来ない。そこで決して自分一人で生きて居るのではない、親の恩、國王の恩、一切衆生の恩を受けて、この一身には數限りないところの恩を受けて毎日を送つて居るといふことに気が附きますと、その時初めて斯の如き多くの恩を受けて居ながら、無意義な生活を送つたのでは済まないナといふことが本當に

解りますから、そこから本當に意義の有る生活に這入るのであります。

これからその事を説かれるのであります。恩を知るといふことが大事だ、恩を知らないで、自分一人で勝手に生きて居られるやうな心持で居ると、善い行ひは出来はしないといふことを言つてあります。

尤も、英吉利のオスカ一・ワイルドといふ小説家がありまして、これは隨分皮肉な事を書くので有名な人であります。そのワイルドの本の中にこんな事がある。若い諸君、君達はどう思ふか、一番良い生き方を教へてやらう。方々金を借り集めて、人が迷惑したつてかまはないから、到る處に行つて金を借りて、左のポケツトに一パイ金貨でも銀貨でも澤山入れ給へ。それから右のポケツトには六尺か七尺ぐらゐの繩を入れて置き給へ、さうしてこの左のポケツトの金を使つて酒を飲んだり、女を相手にふざけたり、芝居を見たり、音楽を聴いたら、出来る

ものだらう」といふやうなことで、諱めて、言ひ譯を言つて生きて居るのであります。これは洵に無意味な事である。だからどうしても自分一人で生きて居るものだと思つてはいけない。又この世の五十年や六十年が人間の生命の全體だと想つてはいけないのであります。そこに目が覺めるといふことが、自分の一生涯を意義の有るものにする根本の力であります。その覺醒が必要なのです。それをこれから後にズツと説かれて居ります。

だけの事をやるが宜い。さうしてこの左のポケツトの金が無くなつてしまつたら、右の方のポケツトにある繩を取出して樹の枝に懸けて首を縊つて死んだらそれで宜いぢやないか。……實にこれは痛烈な言葉です。實際が自分的一生だけ考へるところより外ないので。出来るだけ無理算段をして金を捨へて贅澤をして、贅澤が出来なくなつたら首を縊めて死ねばそれきりだ。これは實に皮肉な言ひ方であります。が、人間が人の事も考へなければ、後の世の事も考へないので、この世に於ける自分の四十年五十年の生活だけを考へたら、結局これは皆勝手な事をやつて、いけなければ死んだらそれまでだ、斯うなるのであります。

併し吾々が考へて見るのに、繩で咽喉を縊める勇氣も無い人がある。さういふ人は何だか知らぬが、平原へ生きて居る、何しに生きて居るか解らないけれども、ナニニ俺一人ではない、世間も大概似た

外典三千餘卷の所詮に二あり。所謂孝と忠となり。忠も又孝の家よりいてたり。孝と申すは高なり。天高けれども孝よりも孝よりは高からず。又孝とは厚なり。地厚けれども孝よりは厚からず。聖賢の二類は孝の家よりいてたり。

佛教ばかりではない、外典と言つて、佛教以外の支那の孔子の教とか老子の教とかいふやうなものに一番大事な事を二つ言つてある。それは孝と忠である。孝と忠と二つを言ふけれども、「忠も又孝の家よりいでたり」親に對して孝行するといふ心持の有る者が、主人に對して忠義を盡し、人に對しても親切を盡すといふ者になる。人間の心といふものは一つきりないのでから、大事な事を大事だと思はない人は、他の事にも熱心になれない人です。自分の眼の前の、親が心配しても何とも思はない、自分と一緒に居る妻子が苦しんで居つてもそれは平氣だといふ人が、天下の爲、國家の爲に力を盡すナンといふ、そんな事は出来るものではない。心は一つです。眼の前の氣の毒な者を見て、氣の毒だと思はない、眼の前の惑れな者を見て惑はだと思はない人が、いきなり世界の爲、人類の爲に力を盡すなどといふことは、有り得ないことです。そんな事を言ふ

のは嘘です、世の中を欺いて居る。人を欺いて居るのです。だから近い所から遠きに及ぶといふことは無論の話であります。それで「忠も又孝の家よりいでたり」自分の現在の親に孝を盡すといふ心持があつてこそ、忠義も出来るのである。世の爲、人の爲にも力を盡すのである。心は一つだから、孝を盡すことも出来ない者が忠を盡すことは無いといふことを、佛教以外の支那の孔子の教などにも言つてある。

孝といふことは高いといふことである。天がどんなに高くても孝よりも高いものはない、又孝といふことは厚いといふことである。地がどんなに厚くても孝よりも厚いことはない。先づ親といふものは一番自分に親しい者で、生れた時から親のお蔭を受けるのであるから、この親を思ひ、親の恩に感ずるといふことがなければ、逆もその他の善い行ひは出来はない。聖人とか賢人とかいふやうな者も、要する

に孝を盡すといふことから起つて居るのだ。斯う孔子の教などでは教へられて居る。

何に況んや、佛法を學ぶ者が、恩を知り恩に報ゆるべしや。佛弟子は必ず四恩をしつて知るべし。

況してや佛の教を學ぶ者が、恩を知り恩に報ゆるといふことを考へないやうでは、折角佛の教を学んだ甲斐が無いことである。それであるから佛の弟子は必ず四恩を知つて、その恩を知り、又その恩に報ゆるといふ心持を起さなければならぬ。

この四恩といふことは心地觀經といふお經の中に詳しく説いてありまして、この四つの恩といふものは、誰でも皆知らなければならぬ事だと言つてあります。さうしてその四恩を順を立てて説いてあります。それが吾々が赤ん坊の時から大きくなるに隨

つて、だんづにその恩が解つて来る。その恩の解つて来る順序に随つて四つの順を立てゝ居ります。ですから一番最初にあるものが一番大事で終ひに来る順序です。それは

一、父母恩

二、衆生恩

三、國王恩

四、三寶恩

でありまして、一番最初に解るのが父母の恩です。何も辨へない生れたばかりの子供は親のお蔭を受けなければ育たないのでありますから、先以て父母の恩といふことが一番先に解ります。それからその次には衆生の恩といふことが解る。衆生の恩といふのは他人の恩です。相當な年頃になれば、お向ふの小母さんとか、お隣りの小父さんといふ者が解つて、可愛がつて呉れれば嬉しいのですから、一番初

めは親の恩だけが解るのでありますけれども、少し経てば衆生の恩、他人の恩もある、斯ういふことがだんなく解る。

それからモツと長じて行けば、國王の恩といふことも解る。これは相當に教育を受けないと解らないけれども、學校にでも通つて相當の教育を受けることになりますれば、國王の恩、國の恩が有難いといふことが解る。これは國王が直接に吾々に善い事をして下さるから有難いといふだけではない、國に王の有ることが有難い、これが根本です。私は學校の教育などでもいつでも言ふのでありますが、天子様が斯ういふ事をして下さるから有難いといふことも、それは善い教だけれども、それだけではいけない。天子様が恵みを掛けて下さるから有難いといふ事ばかり言ふと、それでは恵みを受けない者は有難いと思はないでも宜いかといふやうなことになる。火事があつたり、地震があつた時にお金をお下さつた

うになつたら、それでは國體といふものは立ちませぬ、國民道德の基礎が立ちませぬから、國王の恩といふことは國に王の有るのが有難いのだ。斯ういふ風に考へなければならぬのであります。それでだんだん人間が年が長じて分別が附いて参りますと、國王の恩を辨へるといふことにもなる。

それからモツと進んで行くと、所謂三寶の恩といふことが解る。三寶といふのは佛法僧と言つて、佛様と、佛様があ說きになりました教と、その教と、世に弘める人、即ち僧であります、この三寶の恩といふことは要するに教のことです。人間に教が與へられるといふことが有難い。斯ういふのが所謂三寶の恩であります。前に算へた親の恩を知り、又衆生の恩を知り、國王の恩を知るといふとも、それいふことを知らない。だから結局は三寶の恩、教の恩ともいふのが非常に有難い。教へられるから吾々

から有難いと言ふと、貴はない人は有難いと思はないとても宜いかといふことになる。仁德天皇が三年間人民の税をお徵りにならなかつたのが有難いと言へば、税を徵つて居る天子様はそんなに有難くないか。斯ういふことになりますから、そんなに一つ一つの事柄ばかり考へて國王の有難いといふことを説いたのでは、徹底的のものではない。國に王の有ることが有難い、國を纏めるところの、統一するところの力が無かつたら、國はモウさんぐに亂れてしまつて、國民が一日と雖もその生活に安んずることが出来ないのでありますから、國に王の有ることが有難いのだといふ。それが本當の國王の恩といふ思想であります。これはどうか間違ひのないやうにありたい。若しそこを間違へるといふと、天子様の中に選り好みをするやうになつていけない。あの天子様は情け深いから有難い、この天子様は格別情けを掛けて下さらなかつたから忘れても宜いといふや

は親の有難いことも本當に解るし、國民として國の恩に感謝しなければならぬといふことも能く解るものでありますから、そこで三寶の恩、即ち教の恩といふものが非常に有難い。

この四つの恩といふものが、心地觀經の中にとあります。どういふ人間でも、人間世の中にオギヤアと生れた以上は、親の恩を受けない者は無い。國民である以上は、皇室の御恩を受けない者は一人も無い。又一切の人の恩を受けない者は一人も無い。又教を學んでその教に依つて自分の心が明るくなるのだから、教の恩を受けない者も一人も無い。一切衆生身分が高からうが、低くからうが、生活が裕であらうが、貧しからうが、兎に角人間である以上は、この四つの恩といふものは皆平等に受けて居るのだといふことが心地觀經の中に言つてあります。その恩を知るならば、今度は報恩と言つて、その恩

に報ゆることをしなければ、たゞ有難いと思つたさりではいけない。自分が他の恩を受けて居るのでありますから、その恩に報ゆる爲に自分も又他の人の爲に力を盡さう。斯うなるのは當然である。

其上舍利弗・迦葉等の二乘は二百五十戒、三千の威儀を持整して、味・淨・無漏の三靜慮、阿含經をきわめ三界の見思を盡せり。知恩報恩の人の手本なるべし。然を不知恩の人なりと世尊定給ぬ。其故は父母をすくはんがためなり。二乗は自身は解脱とおもへども利他的行かけぬ。設ひ分々の利他ありといへども、父母等を永不成佛の道に入れば、かへりて不知恩の者となる。

ところがあ釋迦様の教に依ると、その恩を知るといふことにも程度があるので、本當に恩を知るといふには佛教の大乘の教、即ち慈悲の心持を有つて一切に接しなければならないといふ、この教を本當に學んでこそ初めて恩に報ゆるといふ道が立つのであるといふことを言はれて居る。

例へば舍利弗や迦葉といふやうな者は、二乘即ち聲聞とか緣覺とかいふやうなものであつて、初めは世の中の無常を感じて世間に執はれないやうな心持だけを具へた人である。さういふ人でも二百五十戒といふやうな佛様が出家の人の爲に立てられたこの三千といふことは、あまり數が多いから略しますが、要するに威儀といふのは起居振舞です。人間の行儀作法が正しくその道に叶ふことを威儀と言ひます。威といふのは我國では「おどす」といふやうな意味に取つて、人をおどすことが威があるといふ

る人である。

それから又世間に執はれないところの修行をして、三靜慮といふ三種の修行をする。靜慮は禪といふことと同じであります。心を靜にする、心を清淨にして周圍に執はれないやうになることを禪と申すのであります。その禪に三つあります。



風に考へるやうになりましたが、これは間違へてさうなつたので、威といふことは影響を及ぼす、感化を及ぼすことです。例へば王の威といふことは、王様が一人有ると、その王様が周圍を感化して周圍の人を皆善くしてやる、これを王の威と言ふ。あどかすといふことではない。自分が善い行ひをして居ると、自然に周囲の人を善くする、自分が清淨な行ひをして居れば自然に周囲の人を清淨にする。それが威であります。即ち感化を及ぼし影響を及ぼすことです。自分達が行儀良くして居りますと、その行儀の良いといふことは自ら周囲の人の我慢勝手な生活を戒しめる事になります。であるから行儀を良くすることを威儀と申します。自然に周囲の人を感化させといふやうな正しい行儀といふことです。さういふやうに、佛弟子たる者は行儀作法を皆慎しまなければならぬのであります。但し舍利弗にしても、迦葉にしても、さういふ行儀作法は皆立派に有つて居

これを「味・淨・無漏の三靜慮」と言つてあります。先づ「世間禪」といふのはどういふのかといふと、一番初めに佛道の修行をして、さうして自分の心の迷ひを除くやうな修行をする時には、世間禪、即ち世間の普通の人とさう大して變らない心持です。幾らか善いでせうけれども、まだ一世人間の人から離れ切つたやうな所には行きはしませぬ。だか

ら世間禪と言つて、これは坐禪をしなくて宜いの
であります。自分の心の迷ひを除く修行をする
のを禪と言ふのであります。その初めに於ては『根
本味禪』と言つて、味といふのは物を食べて、これ
は甘いとか、辛いとか思ふやうに、自分が少しばか
り修行して少し物が解ると、これは大分善いなと思
ふ。それが味禪です。これはマア本ものではない。
吾々でも少しお經などを読んで言葉が少し解つて、
佛陀といふのはどういふことだと、菩薩といふの
はどういふことだと、南無といふのはどういふ意
味だと解ると『大分俺も解つて來たナ、世間より
餘程偉いナ』と思ふ、それが味禪です。そこで味と
いつて味ひを知るやうに餘程偉いナと思ふのです。
マア初めから本當に覺ることは出來ないから、初め
はその邊から行く『大分俺もこの頃解つて來たナ、
世間の奴が俗物に見える』といふくらゐの所、それ
が味禪です。それから進んで行くと『根本淨禪』と

いふことになる。自分が覺つて、その覺つたのが自
惚れたのでは駄目だといふ、その自惚れを離れた所
になつて来る。それが根本淨禪であります。一番初
めからさうは行きはしませぬ。初めは少しばかり解
ると、心に自惚れたやうになり、得意を感じたやう
な心持になる。それから暫く經つと、自惚れも無
く、得意も感じない、まだト、こんなことでは本も
のではないといふやうになる。その所を通つて行
くのです。

それからだんぐ進んで行きますと『無漏禪』と
いふことになつて、無漏といふのは迷ひをスッカリ
離れる、人に見せたいとか、人に知られたいといふ
やうな、そんな事は迷ひだ。自分が本當に修行して
居つて、自分の心が安かになつて、自分の心が清
淨になればそれで宜いのであつて、人に見られる
の、人に讀められるの、人に誇るの、そんな事はモ
ウ一切つまらぬ事だと思ふといふやうに、覺り切つ
てある。

だから舍利弗や迦葉はさういふ人であるから、こ
れは佛の教を知り、又佛の教に報ゆるだけのはたら
きをする人の手本と言つても宜いだらう。ところが
さういふ人を佛様はまだ（不知恩だ、恩を本當に
知らない人間だと言ひ切つて居らつしやる。それは
何故かと言へば、まだ（慈悲心が足らないからで
ある。一體親の世話を受けて居りながら、親の家を
繼がないで世の中に出で、片時たりとも親に心配を
掛け出家として修行するといふことは、自分が修
行して人生の眞實の意義が解つたならば、自分の覺
つた事を直に親の爲に説いて、兩親とか一家族の者
とか迷つた生活を離れるやうにしてやつて、親を
も兄弟をも救ひたいといふことで、自分が修行する

ア阿含經といふお經の中に説かれた一切衆生の迷
ひを除くといふ教をスッカリ極めまして、『三界の見
思を盡せり』三界は有ゆる世界のこと、見思は前に
申した見惑、思惑と言つて一切の迷ひであります。
この事は前に詳しく述べましたから略しませうが、

要するに吾々が世の中に立つて居る間に起るところ
の、嫉むとか、憎むとか、怨むとかいふやうないろ
いろな迷ひ、さういふ迷ひをスッカリ除き去つた人
である。

だから舍利弗や迦葉はさういふ人であるから、こ
れは佛の教を知り、又佛の教に報ゆるだけのはたら
きをする人の手本と言つても宜いだらう。ところが
さういふ人を佛様はまだ（不知恩だ、恩を本當に
知らない人間だと言ひ切つて居らつしやる。それは
何故かと言へば、まだ（慈悲心が足らないからで
ある。一體親の世話を受けて居りながら、親の家を
繼がないで世の中に出で、片時たりとも親に心配を
掛け出家として修行するといふことは、自分が修
行して人生の眞實の意義が解つたならば、自分の覺
つた事を直に親の爲に説いて、兩親とか一家族の者
とか迷つた生活を離れるやうにしてやつて、親を
も兄弟をも救ひたいといふことで、自分が修行する

のである。ところが二乘といふやうな者は、自分が世間を離れたと思つて居るけれども、まだ利他的行に缺ける所がある。他の人の爲に力を盡さうといふのである。「分々の利他」と言つて、相當に他の人に利益を與へるといふことは出來ても、親達を本當に導いて、親達を佛と同じやうな境界に到達せしめるといふ努力が足らないと、結局親達を永く佛にしないといふことになるのであるから、それでは不知恩の者である。佛の恩も親の恩も十分に辨へないと云ふことになる。

これはお釋迦様が跋提河といふ河の傍で御入滅になる際に、自分の後に遺つた弟子は自利、利他的法を必ず實行しろといふことを言つて居らつしやるのであつて、これは非常に大事な事なのです。自利といふのは自ら覺ることであつて、利他といふのは他の人を教へ導くことでありますが、これはお互に原

す。口がうまく廻るか廻らないか、そんなことは枝葉のことであつて、本當に解つて居るならハツキリ人に言へるに違ひない。譬へば二と三を加へて幾つだと言へば五だといふことは解つて居る。二と三で幾つだと言つたら、喋ることの上手な人でも下手な人でも五つだと言へるのです。あの人は喋ることが上手だから五と言つた、こつちの人は下手だから四と言つた……そんな筈はない。本當に解つて居れば、二と三とで幾つだ、五だ、誰でも言へる。だから佛の教でも、吾々が二と三と加へて五になるといふくらいに徹底的に解つて居つたならば、縱ひ口は不調法であらうとも、言葉遣ひは下手であらうと、人の前に立つて十分に教を説くことが出来る筈です。本當に解つた事が説けないといふ筈はない。それがどうもうまく説けない、人の前で説いて見るといふに委せないといふのは、要するに解つたりよりも、自分が解つて居ないからである。それだ

因となり結果となるものです。自分が少しばかり物が解つて見ると、こんな有難い教を自分一人で有難いと思つて居たのでは、あまり勿體ない、斯ういふ事を少しでも人に教へて、自分と同じ喜びを有つた人を一人でも餘計殖したいといふ心持が起きます。これが自利に依つて利他を生ずるは、たらきです。ところが私共も覺えがあるのであります。人に教を説いて見ると、まだ、自分は足らない者だといふことに気が附きます。家で一人で考へて居ると大分解つたやうな氣がするけれども、人の前で大きい聲で話をして見ると、どうもこれは何と言つて宜いか解らない、どういふ風に説明したら大勢の人に本當に納得が行くのか、どうもその説明の仕方に困るナといふやうなことに思ひ當ります。併し能く考へて見ると、人に話すのがうまく行かないといふのは、自分が本當に解つて居ないからだ、本當に解つて居たら、人に話すくらることは出来る筈で

から利他と言つて、他の人に解らせたいといふ心持が本當に起ると、又これが自利に戻つて来る。これではいけない、やはり自分の修行をモチツとやらう、斯うなる。だから自利に依つて、利他を生じ、利他に努めることに依つて又自利に努める。斯うなつて行く。これは相持ちのものであります。自分一人で部屋の内に引込んで黙つて考へて居つたのは、本當に修行は進まない、世の中に出て人に接して見ると、まだ自分が足らないナ、解つたやうだけれどもまだ解らないナ、といふことが本當に身に沁みて考へられるのであります。

だからいつでも自利利他を兩方考へなければいけない。一切衆生を救ふといふ所謂大慈悲心を起すといふことが大乗の佛教の大事な事なのだから、その大乗の佛教を學ばない間は、縱ひ親の爲に力を盡さうと言つても、自分の親を佛の境界にまで到達せしめるといふだけのは、たらきをすることは出来ない。

だから不知思の者になる。親の恩に報いようとしても本當に親の恩に報ゆることにならない。斯う言つてあるのであります。

維摩經に云く、維摩詰又文殊師利に問ふ、何等をか如來の種と爲す。答へて曰く、一切塵勞の疇は如來の種と爲る。五無間の具するを以てすと雖も、猶能く此大道意を發す等云々。

維摩經の中には、維摩居士と文殊師利菩薩との問答があります。維摩居士が文殊師利に問うて言ふには人々は皆佛性を具へて居る、だん／＼修行して行けば佛の境界にも到達が出来るといふことを聞いて居るが、どういふのが佛の境界に到達する種になるのかといふことを問うた。そこで文殊が答へて言ふには『一切塵勞の疇は如來の種と爲る』塵勞といふ

参ります。その自分の迷ひを自覺して新しき生活に入りたいと思ひ詰めることが所謂發心であります。發心しなければいけない、發心をしないで、ただ無暗に本を讀んで居つて、たゞ形の上の信心をして居つても、それは本ものにはならない。發心しなければいけない。能く考へて見ると自分の今までやつた事に偽りが多い。間違ひが多いといふことに想ひ到つて、本當に自分達は煩惱のかたまりだ、凡夫の生活ばかりやつて居つて済まなかつた。何とかして斯ういふ境界を離れない。斯う思ひ定めます。迷つた人間がその迷つたといふことの自覺に依りまして、覺りの方に入つて行きます。それですから『五無間の具するを以てすと雖も、猶能く此大道意を發す等云々』迷つた心の中には無間地獄といふのが五つあります。その五種の無間地獄に墮ちるやうな、罪の心、迷ひの心もあるのだけれども、それはナニモ失望すべきものではないのであつて、自分が迷つて

居る。自分が罪を作つて居るといふことに気が附いて参りますと、大道の心持と言つて、佛の教を學んで、自分も助かるし、又一切の人間を教へ導くやうな大きなはたらきもしようといふ心持を有つて来るのです。

だから何と言つても自分は凡夫である、自分は迷つて居るといふことを心から自覺するといふこと。そこが大事です。少しばかり物を習つて自惚れてしまつてモウ澤山だといふことになれば、それつきり進歩といふものは無い譯です。自ら足れりとしないといふことが非常に美しいことである。一軒の家でもさうです。皆『俺が／＼……』と思つて、主人は主人で俺が偉いと思ひ、細君は細君で自分が抜目がないと思ふといふことであれば、いつまで絆つてもその家は良くならないのであります。皆が自分を省みて、ア、自分は足らないナ、自分が悪かつたナと氣が附けば、その氣が附く心持が本になつて、

のは煩惱であります。その煩惱を具へた人間が佛に成れるのだと言ふ、といふのは、煩惱を具へて、自分が煩惱の爲に悩まされるといふことに氣が附くと、そこから佛に近づきたいといふ奮發心が起つて来る。自分が迷つて居ながら、迷つて居るといふことに氣の附かない者は、一番始末の悪い者です。體が悪くて『自分はどうも工合が悪いナ』と氣が附けば、脣者に掛つて藥を服む氣になるけれども、自分が病氣に罹つて居りながら、『ナーニ至つて壯健だヨ、チツトモ病氣は無いヨ』と言つて居る者は、脣者に懸ることを勧めても懸らない、藥を服むことを勧めても藥を服まないから、結局夭折してしまふ。それと同じ事であります。自分は凡夫であつて、洵に迷ひに悩まされて居る。こんなに迷つて居つてはいけないナと氣が附きますと、迷ひを離れたいといふ心持が非常に力強く起つて参りますから、それが本になりまして佛の境界にも近づくやうになつて

その一軒の家といふものは、洵に明るい、圓満な家になる。

これは越後の方で聞いた話ですけれども、或る百姓の家で、小さい家だから、戸口に釘を打つて、そこに米を入れるところの箕といふものを掛けてあつた。ところが或る日田園に行つた主人が、正午頃に晝飯を食はうと思つて、家へ歸つて来て戸口を開けると、その戸口の上の釘に掛けた箕がバタリと落ちた。するとその主人は『ア、惡かつたナ、これは俺が氣を附けてこの戸を開ければ宜かつたのに、無暗に開けたものだから、誰か此處に箕を掛け置いて呉れたのが落ちて悪い事をしたナ』と言つた。さうしたら細君が出て来て『イーエ、それは私が悪いのです。そんな所に掛けなければ宜いのに、そこに釘があつたので、ツイそれに掛けたものだから、それであなたが戸を開けた拍子に落ちたので、私が悪うございました、気が附させねでした』と

言つて詫びた。さうすると姑婆さんが奥から出て来て『イヤ、私が氣が附かなかつたのだ、お前がそこに掛けることを今朝見て居つたのだが、私はモウ七十歳にもなつて、随分経験も積んで居るのだから、そこは危いと言つて注意すれば宜かつたのに、私がポンヤリして注意しなかつたから、こんなことになつた。全く私が行届かないのだ』と言つて、夫婦と親とが互に罪を自分の身に引受けた詫び合つた。これは隣家の人が聞いて『ア、あの家がいつでも明るいのは不思議はない、皆が責任を自分に負うて、皆が自分が足らない』と言つて居るから、あゝいふ人が集つて、洵に平和な一家をつくるといふことは不思議はない』と言つて非常に感じたといふ話があります。これは極く子供騙しのやうな話ですが、そこで真理があるのであつて、互に自分を足らないと考へて、自分を振返り、自分を責めるといふことに依つて、初めて本當の道が開かれて参ります。

それをこゝに言つて居るので、自分は凡夫だ、無間地獄に墮つべき者だと知つて、自分を戒しめることになる、その地獄に墮つべきやうな者が佛道を成じて佛の境界にも到達するやうになつて行く。それを自分で戒しめることをしないで、少しばかり物が解つたからと言つて自惚れるやうなことであれば、その自惚れが本になつて結局自分は救はれない者になるといふことを言つてあります。

又云く、譬へば族姓の子、高原陸土には青蓮芙蓉華を生ぜず。卑濕汗田に乃ち此華を生ずるが如し等云々。又云く、已に阿羅漢を得て應眞と爲る者は、終に復道意を起して佛法を具すること能はず。根敗の士、其五樂に於て復利すること能はざるが如し等云々。

又同じ維摩經の中にあるのに、譬へば『族姓の子』といふのは、大變に家柄の良い家の人と、いふものは、家が良いといふ自負心があるから、兎角に救はれないものである。譬へて言へば、地面の高い陸の上には、美しい蓮の華とか、芙蓉とか、又衛華といふのは菱の華、菱の華といふものも美しいものですが、さういふ華は生じない、極く低い濕つた汚ない田園のやうな中に、蓮の華や、芙蓉の華や菱の華は生ずる。それと同じことで、自分が偉い者だと思つて、高ぶつて、世間を眼の下に見下して居るやうな者は、いつまで經つても覺りを開けないのだ、自分は低い所に居る人間だ、自分の心には迷ひが多いのだと思つて、自ら卑しんで自分を振返つて居りますと、美しい華を開くやうな好い結果を生ずるのだ。斯ういふ事をその維摩經の中に言つてある。阿羅漢といふやうな心の迷ひを除くことが出来て『應眞』といふのは眞實の道に應じて生れたといふ

意味で、阿羅漢といふことを又別の名前で應眞とも申します。即ち眞實の道に一致する者だと世間に認められるやうな、そんな高い覺りを得て、さうしてこれで以て足れりとして、モウ澤山だと思つて居る者は、これより進んでモツと道を學ばうといふ心持は起きて來ない。世間で皆に持囃されて、「偉い人だ偉い人だ」と言はれると、大層偉い人のやうな氣になつてしまつて、それより以上道を求めようといふ心持は出來ないから、佛法を具することが出來ない、佛と同じには成れない。そこで『根敗の士』と言つて、根といふのは、五根と言つて、眼の力や耳の力や鼻の力を申しますが、その力が無くなつたやうな人は「五樂に於て復利すること能はず」美しい物を見て楽しむことも出來なければ、美しい聲を聞いて楽しむことも出來ない。それと同じで、モウ自分で澤山だと思ふと、自分で自分を限つてしまつて、自分の進む道を塞いでしまふのだから、これより進

んで本當の利益を得、本當の徳を成就することが出来ない。何としても吾々は折角佛性を具へて居るのだから、この佛性を十分に發揮して、佛様と同じやうな覺りを開くまでは、決して自ら足れりとすまいといふ心持を有たなければいけないといふことがいろいろな大乘の經典の中に説いてあります。

文の心は貪・瞋・痴等の三毒は佛の種となるべし、高原の陸土には青蓮華生すべし、二乗は佛になるべからず。いう心は二乗の諸善と凡夫の惡と相對するに、凡夫の惡は佛になるとも、二乗の善は佛にならないとなり。諸の小乘經には惡をいましめ善をほむ。此經には二乗の善をそしり凡夫の惡をほめたり。かへて佛經ともおぼ

へず、外道の法門のやうなれども、詮ずるところは二乗の永不成佛をつよく定させ給ふにや。

その經典の心持を言へば、貪・瞋・痴といふやうな三毒を具へた者が佛の種になるのだ。三毒が佛の種になるのではないが、自分の心に、貪・瞋・痴といふ迷ひがあることに気が附いて、それから佛に成る道が開ける、又親を殺すといふやうな五逆罪を犯した者も、その五逆罪を犯したのに気が附けば、それが佛の種になる。假に高い土地に蓮華が生ずるといふやうなことがあらうとも、二乗即ち世の中の無常を感じ自分で足れりとする者は佛に成らない。その譯は「凡夫の惡は佛になるとも二乗の善はありません。凡夫は悪い事をしても、悪いと氣が附けば、それが佛に成る本である。二乗と言つて、聲聞

や緣覺で善い事をしても、それが善いと思つて自惚れて澤山だと思つてしまへば、それは結局佛に成らない。だから惡い者が悪いと氣が附くといふことが非常に尊いことである。少しばかり善い事をして、善いと思つて自惚れてしまふと、それは行き止りだから、その方が悪いことになる。

諸の小乘の教では、悪い事をしてはいけないと言ひ、善い事を讀めて居るが、この維摩經の方で言ふと、折角覺りを開いて善い事をして居ると、その善つと思ふとかしい。却て佛の教と思はれないやうに思ふ。外道の、佛法の敵となるものの教のやうだい事を誇つて凡夫の悪い方を讀めて居るから、ちょうど、その趣意とする所は、「二乗の永不成佛」と言つて、少しばかり覺つて、それで足れりとする者は、結局佛の境界に行かれないのである。その精を、言葉を強くして言つただけの話である。その精神の在る所を十分に汲んで行かなればならない。

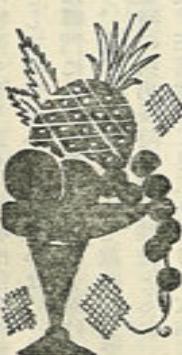
方等陀羅尼經に云く、文殊、舍利弗に語らく、猶枯れたる樹の如き更に華を生ずるや否や。亦山水の如き本處に還るや否や。折れたる石還つて合ふや否や。焦れる種芽を生ずるや否や。舍利弗の言く、否なり。文殊の言く、若し得べからずんば、云何ぞ我に菩提の記を得るを問うて、心に歡喜を生ずるや等云々。

學んでも、佛様の境界に近づくことは出来ない。斯ういふ事を言つてある。それなら佛の境界に近づくにはどうしたら宜いかといふその大問題を解決する爲に、法華經といふものが説かれたのだから、心を潜めてこの法華經を學ぶならば、必ず佛の境界に成れるのだ、斯ういふことになる譯であります。

文の意は枯たる木華さかず。山水山にかへらず。破たる石あはず。いれる種をいはず。二乘また是の如し。佛種をいれり等となん。

今の方等陀羅尼經典の意味は、枯れた木には華が咲かない、山から落ちた水は山に還らない、破れた石は再び合はせられない、火の上で焦した種は、その中から芽が生えない。それと同じやうに、二乗即ち佛の小乗の教を聞いて、それで満足して居る者

が言ふには「その通りだ、自分が菩提の記を得ると言つて、文殊師利が佛様から、お前は將來佛に成れるぞと仰しやつたのを他で聞いて、文殊が佛に成るなら、やはり自分も佛に成るだらうと言つて、喜んで居る者もその通りだぞ、文殊が佛に成るのは、文殊が菩薩の行を積んで、一切衆生の爲に力を盡さうといふ心持があるから、お釋迦様がお前は將來佛に成るといふことを許されたのだ。その大事な所を考へないで、同じ佛の弟子である文殊が將來佛に成るのだから、自分達も何とか成るだらうナン」と言つて、自分を振返ることもしないで、自分の修行の足らないことを反省しないやうな者は逆も駄目だ、斯ういふ事を文殊が言つて居る。この通りであつて、如何に佛の教を學んでも、自分に反省して自分で振返つて見て、自分が大慈悲心を以て一切の人につけて、一切の人を救ふ爲に力を惜しむまいといふこの大決心をするのでなければ、如何に佛の教を



大なる悦と歎

(上篇)

まんじ

弘長元年五月十二日を現行暦に推算すれば六月十八日に相當するといふが、その昔六百七十餘年前、日蓮聖人伊豆の御法難を偲んで今更ながら私共の道念に鞭撻たるのである。何が原因となつてそんな罪人扱をされねばならなかつたのか、この本源を追究する時に自ら感謝の涙に咽ぶ。聖人が御流罪中に天津の工藤氏にお與へになつた『四恩鉄』の初めに抑此流罪の身になりて候につけて二つの大事あり、一には大なる悦であり、又一つには大なる歎とされた。今これを本題目に頂戴して聖氣ながら其の往昔を追憶致し、聊か報恩に擬すると共に、正法護持の大切であることを憶ひ、私共の信念の増進に資したい。

○
聖壽三十二、建長五年の春、房州清澄の嵩森で御開宗後三年を過ぎた建長八年二月末日關東一圓は大風雨につれ大洪水となつて人畜の死傷夥しく、六月に入つて又時ならぬ雨風が猛烈に起り、殊に鶴ヶ岡八幡宮の社殿が突然震動して鍾倉中

ない、處が九月四日又復強震起り遅々として十月十日に至つた。然るに此日一天俄かに疊つて鉢のやうな火柱が八方に立ち、見る／＼大雷電轟き耳を掩ふにも、目を閉づるにも、居る場所にもどうにも恐ろしさとふるに物がない。

かかる有様が連發しては、百姓は銅鏡を把らず、漁夫は沖に出でず、商人は店を開かず、職人は業を勵まず、人心益々不安に製はれ途方にくるゝばかり、従つて野には五穀を獲ず、飢餓に續いて疫疾の流行となり、路傍には乞食と死人が目に溢れ、これこそ彌々此の世の終末と見へた。

翌二年八月一日には大風に見舞はれて、野の収穫は皆無となつた。泣顔に蜂とはこんを場合を指すか。

翌年正元と改元され、聖壽三十八、此の年は大疫病に死する者數を知らず、而して九月二十八日の夜分に妖星出で、長さ四丈ばかりの尾を曳いて西北より東南へと飛ぶに、其もの凄い光りと山岳の鳴動に凝視する者は一人もなかつたといはれる。

翌年に至るも大疫は已まない、國民の大半は死滅してしまふといふので、北條幕府も之に驚いて、更に各方面に祈禱をせしめたが、一分の驗もなく還つて飢餓と流行病の暮るばかり……上下不すべき宿も知らず唯途方にくれた。

かかる背景に、日蓮聖人は未法救護の大導師、一大決心の下に松葉ヶ谷の庵室を去つて駿州岩本の實相寺に入り、五度

が地震のやうに物凄く鳴り亘り、人心は何か異變の前兆ではないかと悔々として不安にかられ落付かない。その十一月に北條執權時頼は禪門に入つて覺了坊道崇と號け、世にいふ最明寺入道となり、その子時宗は漸く七歳の幼童であるから、一族の陸奥守重時の次男長時を以て補佐とした。

聖人三十六歳、正嘉元年二月二十三日に大地震勃發、五月十八日再び大地震、加之大旱魃で夏の初より一滴の雨もない、全國の被害は夥しいもの、そこで各方面的神社佛閣へ災難除けの御祈願を命じたが、何等の驗ないばかりか、八月朔日に三度目の大地震で、人々は極度の不安に襲はれてしまつた。處が同月二十三日地鳴りがしたかと思ふ間もなく忽ち強烈な上下動の大地震、それはかの大正十二年のものよりも幾層猛烈であつたらし、大地は大波の如く押し上げ、搖り下すとあり、至る處の家屋敷は勿論立派な堂塔伽藍等砂煙をあげて見る／＼間に碎け潰され、人畜の死傷數限りなく、全くこれがこの世の最後かと思はせた。かの關東大震災に直面した人々には充分想像されることと思ふが、その物凄い山岳の鳴動は夜に入つてもなか／＼息まない。大地は到る所三尺五尺と割れて、そこから泥水が泉のやうに噴出せるもあり、又時々裂けた地中から青焰の毒舌をベロ／＼出して暗を照らす有様は全く凄絶を極め、大眾生ける心地もないのは無理からぬ事である。餘震は十日以上も續いて容易に安定せ

る立正安國論となつて文應元年七月十六日、寺社奉行宿屋左衛門・尉光則を經て幕府に上書された。曰く
旅客來つて嘆いて曰く、近年より近日に至るまで、天變地
妖、飢餓疫疾遍く天下に滿ち、廣く地上に遂る。牛馬巷に
蔽れ、骸骨路に充てり、死を招くの輩、既に大半に超え、
之を悲まざるの族取て一人も無し……或は七難即滅七福即
生の句を信じて百座百講の儀を調へ……若くは天神地祇を
拜して四角四堵の祭祀を企て、若くは萬民百姓を哀んで國
主國宇の德政を行ふ。然りと雖も單肝膽を振くのみにして
彌々篤疫に逼る。乞客目に溢れ、死人眼に滿てり。屍を臥
せて覗となし、戸を並べて橋と作す……是れ何なる禍に依
り、是れ何なる誤に由るや……
信徳管を傾け聊か經文を披きたるに、世皆正に背き、人悉
く惡に歸す。故に善神國を捨てゝ相去り、聖人所を辭して
還らず、是を以て魔來り、鬼來り、災起り難起る。言はず
んばあるべからず、恐れずんばあるべからず。
時代文を以て其諸難の原因是彌陀念佛の跋扈に基く、これを此僅放任しておけばやがて内亂外寇の二難必ず起ると幾多の經文を引證し、速かに法華一佛乘の正信に歸して現世安穩、後生善處を希ふべきだと主客十双の問答牋に作られた有名な大論文で、聖人三十年の活動の一貫せる告白である。

一大爆弾を投げかけられた幕府は、大學三郎能本をして一門評議會の席上に朗讀させた。時頼入道は流石に誠思默考の想であつたが、陸奥守重時はその意味合が理解出来ないから能本に要領を訊ねた。能本はさることと思つたが色にも現さず徐ろに其の要旨を申述べた。チリ〳〵して居た重時は、能本の言葉が終るや否、忽ち聲を荒らげて『言語同断の日蓮房の振舞かな、彼の姫惜奴、我が政道を棄るばかりか、先師大徳を蔑せる傲慢不遜の申條、その分にはおけない、目にもの見せんと』教訓いた。

傳説に傍れば、一座の様子を見た最明寺入道は『先づ靜かに、自分も既に佛門に入つた者、殊に客は予に擬へたものなれば直接に值うて彼の胸中を糺すにしかず』と、旨を宿屋左衛門に傳へたといふ。

數日後の七月二十四日、聖人は時頼到来とばかり凜然として、日朗、日興等を伴つて教權の館へ出向れた。これぞ聖人一個の問題でなく、大法興廢を決する一遇のチャンスである。即ち妙法の廣布如何は直ちに國家の盛衰に關する大事であるのみならず、人として眞に向上するか墮落かの分岐點にある。

先づ初對面の挨拶もすんで、時頼は改まつた聲で訊たね。

周の世に下賤の一婦、自己の機縫りをも忘れて天下の亂れを心痛せし故事は夙にご存じでござらう。卑しき一老婦すら已れが住む國土の亂を慨き申す、不肖たりとも日蓮、佛勅を蒙りて神州に遣ひするもの、數年來、連々たる天變地妖飢餓疫癆に畏れを懷き、萬祈を修せらるゝも其體のなきのみか、却て災禍の倍増致すを見て何様其儘に黙さるべき、これ何が故と思召さるゝ？ 証する所、法華の正法を遠離し、法然上人の捨閑閣捨の邪義にお心づかれざるはうたてき次第でござる。

抑も妙法蓮華經は諸經中の大王でござる、教主釋尊五十年已今當三說超過の大白法でござる。されば其の大功德は他經の比に非らず、經文中明白に一念信解の功德は五波羅蜜の行に超へ、五十度縛の隨喜は八十年の布施にすぐれたりと記さる、若し須彌山を剖つて覗とし、三千世界の草の葉を筆とし、五大洋の潮を磨つて書き續くるも、猶盡し難きは妙法華經の大功德でござる。かゝるいみじき御教ありながら、これを捨てゝ教外別傳と稱へ、或は不立文字と申す如きは天魔の行爲でござる。此の釋尊出世の本懷たる妙法華經を誇り又は信ぜざる者は永く無間の獄に墮ちて出づべきこと難しとは經文の明鏡に依る。のみならずこの娑婆に縛あつき本師釋迦牟尼世尊を開て、他佛を崇拜する如きは悖徳の行爲、これ亡國の思想でござる。其他自身教家の本分

『先日の上書を一覽した、然るにあの文に書かれてある事は出家にあるまじき出過ぎ方、これ萬人の信仰を惑はす、のみならず、我が政道の事を兎や角論ぜらるゝは合點の行かぬ事である。これには深き所存あつての義と思はるゝで態々お招き申しした。御腹蔵なく眞意を申述べられよ』と、表面はやさしく見へたが、内面に劍を含んだ訊問である。

聖人の御態度は御自分の庵室に居られて求道の士女に對すると同じく慈眼を以て凝視されてゐたが、やがて語り出された。

『御詫の趣き一應は御尤と存する、かの勘文一通、文字の數は尠なけれどもその意義は極めて深きものでござる、これ日蓮の筆にして日蓮の自作にはあらず、教主大覺世尊の感應の致す處、いでこれより聊か申上ぐるでござらう。凡そ人と國と教の三者は別離すべきものでなく、善人が住めば、善國となり、善國は教を尊重いたすでござらう、故に正善の教法興隆いたせば善人の出來ること申上ぐるまでもなき次第、實に教と國と人は伊字の三點なることは既に御存でおはさう。唯國の事のみにかゝりて人を忘れ、又人民の幸福を思ひて國家の大義名分を忘れ、宗教の廣布を希ふて國家を度外視致するもの多き現代にあたり、苟くも日蓮生を此國にうけて豈我國を思はぬ道理がござらうか。その音

を忘れ、釋尊の大教を辨へずして徒らに世間的順世外道の如き態度をとる者は、宜しく駁罰に處すること萬祈を修するよりも先決の問題でござる。

夫れすべてのものに必ず前相あり、從つて國家の將に興らんとするには先づ神祚あり、又國家の衰運には必ず妖變おこる。此歲々打續く天災地變死屍の累々たる果して吉瑞と申されやうか、爲政家の本分は其の災禍の根元を研討して善處致さるべきではござるまいか。即ち無間地獄の業因たる念佛、天魔波旬の凶徒たる禪宗、亡國思想の惡法たる眞言、神國國色の匪賊たる律宗等の邪法邪師を遠かに處斷し、法華一乘の正法正師を御用ひ遊ばす様願はしう存する。是れ肯て我が身の爲めに申すに非らず、偏へに御國の爲め、神の爲め、人の爲めに強言仕る、希くは遠かに御賢慮を廻らし給へ』

と、憚る色もなく懸河の熱辯に、至誠の焰は時頼の心身を焼き竭さん有様！ 一座の面々悉く手に汗を把り二人を見くらべて居た。

此時、最明寺入道は、先程よりの鬱憤おさへきれず歎然と起ち上り、

『イヤ能くも申したりナ、片腹いたき縁言、氏素性も知れぬ小僧の詞を信じて、我三國傳來の諸宗を打捨つることのならうか、最早難言無用！』

記

事

本部團報

御書講座　日蓮聖人開目妙の講義が、毎週一回午後七時より八時半まで小林先生に依つて開講されて居る。從來は毎水曜日であったが、五月より都合で火曜日に變更され、今や該妙の白眉中の白眉とも稱せらるべき頂上に達せんとしつゝある。求道の七女齊つて來聽すべきである。

日蓮聖人立教會　四月二十五日の日曜日をトして午後三時より吾等の最も記念すべき立教開宗會の法要と講話を聴んだ。此日は開員總會の爲め福島支部を代表して參列された夏谷江南先生は「健康書道の宗家であり、好焼造すべからずと『健康書道に就て』」のお話と、且つ實演をされて來會者一同に多大の感銘を與へられた。中村清一先生は『實在意識の信』に對して懇切なる教説を垂れられ各位に甚深の信念啓發に資せられ、本日の奉日を極めて意義附けられて自他法慶に終し五時過講會した。

伊豆御難會　五月九日の日曜日午後二時より弘長の昔を追憶し、御恩の千萬が一分にもと、和賀義見師を導師として一同修法齊唱した。終つて法話が磯部滿事氏の『法華經の眞心』及び和賀師の『流罪の聖人』題下に夫々専釋を振はれた。其後座談茶話會に、隔意のない同志の法義上に關する意見の交換もあつて、漸く五時頃閉會、次回を約して別れた。

日曜講集　毎週日曜日午後二時より五時頃迄、法要勵行と講話會が開催され、夫れ／＼行學二道の精進にいそしまれる。

福島支部報

四月二十八日、於高商　御多忙中の磯部先生の御臨席を仰ぎ、午後三時半より新入會員歡迎會を兼ね例會を開く。歡迎會に先立ち先生より釋尊花祭の意義、及び人として行くべき道を説かれた。釋尊の教が如何に私共に大切なものなるかを承る。尚先生は稍もすれば、陰鬱に思はれ易い佛教は、却て實に潤滑たるものであると生徒の爲に詳々と御説きになられた。引續き歡迎會に移り磯部先生、校長先生、吉松會長、入江教官等の御講辭、高橋先生の御思想、岩井支部長の激論の御言葉等あり、盛會であつた。會する者三十七名。

於中村家　高商の會を卒へさせられた先生は、殆ど息つく間もなく夜の例會に御出席なされ、誠に感激に堪へませんでした。圓らずも本日は聖人が旭ヶ峯で南無妙法蓮華經と始めて御題目お唱へになり、生命を賭けて法華經の爲に奮闘を続ける決心を表白なされた日と承り、奇しき日に例會を開いたるものよと集ふ者一層有難く感謝す。而して末法の世法華經を廣むるに、聖人が内外の迫害を物ともせず却て喜んで教の爲一身を擲げられたその御奮闘振りの誤ぐましを承り一同感激す。次いで一般座談會に移り夜の更るも知らず十一時散會。

編輯室より

圖費誌料維持費及寄附金領收			
(自四月二十一日)			
(至五月二十一日)			
一金 參拾圓也	市川 立正 會設	一金 拾圓也	市川 立正 會設
一金 參拾圓也	東京 字野 博順殿	一金 參拾圓也	東京 字野 博順殿
一金 武圓五拾錢也	福島 原田 有賤殿	一金 六圓也	神戸 林 重太郎殿
一金 武圓五拾錢也	同 菅野康太郎殿	一金 武圓五拾錢也	東京 加藤曉之助殿
一金 參拾圓也	東京 横山 正三殿	一金 武圓五拾錢也	愛知縣 増井 昇殿
一金 參拾圓也	愛知縣 中村新次郎殿	一金 武圓五拾錢也	基隆 高橋 日應殿
一金 武圓五拾錢也	神戶 舟橋 英一殿	一金 武圓五拾錢也	東京 沼部彌太郎殿
一金 武圓五拾錢也	同 中村 美津殿	一金 參拾圓也	久野 柳子殿
一金 武圓五拾錢也	同 山縣 もと殿	右雖有入帳仕候也	竹内 文治殿
一金 八拾錢也	同		
一金 武圓貳拾錢也	愛知縣 山本 金太殿		

財團法人統一團會計

御周知の如く印刷費昂騰の爲め一般誌料改正の向も有之候へ共
本誌は文書布教用として多大の犠牲を忍受致居申候に付篤志護
法の士女は何卒圖費誌料の御滞納なき様念願仕候

◆ 大八木先生の和歌三首、現代の婦人達に
殊に御批判願ひたいものです。
◆ 本多上人の「大藏經要義續篇」は益々數
邊されまして、モ少し直を看すやうにとの御
注文もあり、又卷末におくやうとの御看記も
ありました。可成各の御意に添ふ様に編輯
致したいと存じます。
◆ 追々入梅用節に向ひます、皆様の御健勝
を毎朝お祈り致して居ます。南無妙法蓮華經

常に樂ふて聞きて厭足有ること無し。三には眞俗の勝智樂ふて善く分別す。四には見修の煩惱咸く速かに斷除す。五には世間の伎術五明の法皆悉く通達す。(見思) 善男子よ、是を菩薩摩訶薩は智慧波羅蜜を成就すと名づく。善男子よ、復た五法に依りて菩薩摩訶薩は方便波羅蜜を成就す。云何んが五と爲す。一には一切衆生の意樂の煩惱心行の差別に於て悉く通達す。二には無量の諸法對治の門、心に皆曉了す。三には大慈悲定出入自在なり。四には諸波羅蜜多に於て皆修行し成就し満足せんことを願ふ。五には一切の佛法皆了達攝受して遣すなからんことを願ふ。善男子よ、是を菩薩摩訶薩は方便勝智波羅蜜を成就すと名づく。善男子よ、復た五法に依りて菩薩摩訶薩は願波羅蜜を成就す。云何んが五と爲す一には一切法は本より以來不生不滅にして、有に非ず無に非ずとして心に安住を得。二には一切法の最妙の理趣は垢を離れて清淨なりと觀じて心に安住を得。三には一切の想を過ぐる是の本なる眞如は作無く行無く異なるらず動ぜずと心に安住を得。四には諸の衆生を利益する事を欲するが爲めの故に俗諦の中に於て安住を得。五には奢摩他と毘鉢舍

【五明】 聰明とて文法修辭等、工巧明とて美術、工藝等、醫方明とて醫學、因明とて論理、内明とて宗教特に佛教。

【奢摩他】 寂靜、能滅と法す
微を拂め散亂を離る。
【毘鉢舍】 奢摩他的止に対する觀なり。事理を觀見す。

那と同時に運行することに於て心に安住を得。善男子よ、是を菩薩摩訶薩は願波羅蜜を成就すと名づく。善男子よ、復た五法に依りて菩薩摩訶薩は力波羅蜜を成就す。云何んが五と爲す。一には正智の力を以て能く一切衆生の心行の善惡を了す。二には能く一切衆生をして甚深微妙の法に入らしむ。三には一切衆生の輪廻、生死其の縁業に隨ひて實の如く了知す。四には諸の衆生、(上中下) 三种の根性に於て正智力を以て能く分別して知る。五には諸の衆生に於て理の如く爲めに説き、善根を種へて成熟度脱せしむ。皆是れ智力の故なり。善男子よ、是れを菩薩摩訶薩は力波羅蜜を成就すと名づく。善男子よ、復た五法に依りて菩薩摩訶薩は智波羅蜜を成就す。云何んが五と爲す。一には能く諸法に於て善惡を分別す。二には黑白の法に於て遠離し攝受す。三には能く生死涅槃に於て厭はず喜ばず。四には福智の行を具して究竟處に至る。五には勝灌頂を受け能く諸佛の不共法等及び一切智智を得。善男子よ、是を菩薩摩訶薩は智波羅蜜を成就すと名づく。善男子よ、何者か是れ波羅蜜の義とせん。所謂、勝利を修習する是れ波羅蜜の義、無量の大甚深の智を満足するはれ波羅蜜の義、行と非行との法に心執著せざる是れ波羅蜜の義、生死の過失と、涅槃の功德と、正覺正觀す是れ波羅蜜の義、愚人も智人も皆悉く攝受す是れ波羅蜜の義、能く種種の珍妙

の法實を現する是れ波羅蜜の義、無礙解脱智慧の満足する是れ波羅蜜の義なり。

金光明最勝王經卷第五

蓮華喻讚品第七

爾の時に、佛、菩提樹神の善女天に告げたまはく、過去に王有り、金龍王と名づく。常に蓮華喻の讚を以て十方三世の諸佛を稱歎す。即ち大衆の爲めに其の讚を説いて曰く

過去未來現在の佛

我れ今至誠に稽首して禮し

佛の功德を讚するに蓮華もて喻へん 願くは無生を證し正覺を成せん

諸佛の出世は時に一たび現ず

百千劫に於て甚だ逢ひ難し

一心に諸の最勝を讚歎す。

本多日生上人著書特價提供	
聖語錄	法華經要義
改版	日蓮主義心髓
題天覽	日蓮主義精要
送料共價	真理の基礎に當つ佛教の信仰
全	法華經要品
全	生上人レコード(四面)
全	日蓮聖人
全	本尊意識に就道
全	法華經の八相成就道
全	釋尊の心髓
全	本多日生上人
全	勸行作法
全	河合勝明著

七十ノ六町羽音區川石小市京東
部出版團一統 法圓人

番〇二四九京東替振

不許複製	注	債定一統
	▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可	一量半ヶ年
	▲御申込ハ總テ前金ノ事	一ヶ年
	通知ノ事	金貳圓貳拾錢
	御候居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御	送料共
昭和十二年五月廿七日	印刷納本	金貳圓貳拾錢
昭和十二年六月一日	發行	送料壹錢
(五百七號)		

東京市小石川區音羽町六ノ十七
印 刷 所 東京市小石川區音羽町八ノ十一
印 刷 所 野島好文堂印刷所
電 話 牛込六九六六番

月「教」誌
申込所 振替口座東京一〇九四〇番目
送定料一冊
料一年前共金

「教」發行所

金五拾厘錢
金貳圓貳拾錢
金五拾厘錢
金壹圓貳拾錢
金拾錢
金壹圓七拾錢
金貳圓五拾錢
金貳圓廿五
金五拾錢
金五拾錢
金壹圓五拾錢
金拾錢
金壹圓

東京市小石川區音羽町六ノ十七
印 刷 所 東京市小石川區音羽町一
印 刷 所 野島好文堂印刷所
電 話 牛込五三三六番

次 目

聖訓摘要	本多日顯正生
日蓮宗概觀(其八)	故梶木
開目鈔講話(第九講)	小林一郎
遺教經雜感	笹木欣爾
記事	

○本部團報 ○地方教信
○團費誌料等領收 ○編輯室より

統一團發行

法財人團

統

團發行